

研修事業紹介記事

Quintessence
HATTATSU

発達

146
2016
SPRING

C O N T E N T S

【特集】地方発！保育・子育て支援の新たな取り組み

地方発の保育・子育て支援の新たな可能性 ― 新制度時代の臨働のよからん ―	大豆生田啓友	2
地域一帯型による保育の質向上研修の開発 ― 豊後市の挑戦 ―	北野幸子	8
子ども主体の協同的な学びプロジェクト ― 豊田区の取り組みの報告から ―	高嶋美子	14
子どもにこそ 長ら目で ― 横浜の保幼小連携 ―	寶来生幸子・渡辺英則	20
区民とともに「保育の質」を高める ― 世田谷区の取り組み ―	猪熊弘子	26
保育に関わる研修体制の整備のために ― 札幌市の取り組みと保育所運営・保育士のあみ ―	北野久美	32
幼稚園教諭・保育教諭・保育士の専門性を高める研修 ― 豊後県教育センターにおける新たな取り組み ―	山文一	38
子育て支援のコミュニティネット ― 利用者支援事業への期待 ―	奥山千鶴子	44
「お話」から始まる切れ目ない支援 ― わらな産子センター・子育て世代包括支援センターの取り組み ―	神原久子	50
とくに地域と豊らち仲間として何ができるか ― 豊後県産子センタープロジェクト ―	高岡紀子	56
私たちにも役割がある！ 区民版子ども・子育て会議のつくりかた	松田妙子	62

妊娠期からの切れ目ない支援と「日本版スロモコ」	神原紀子	68
全面のあちこちで動き出した新たな保育・子育て支援の取り組みへの期待と展望	汐見綾幸	74

<p>◆ 連載</p> <p>随がいのある子の保育・教育のための教養講座 ― 表紙版から学ぶ保育（教育指導課）</p> <p>〈連載①〉 手控の「身体」による「やりくり」</p>	佐藤 暁	79
<p>保育に活かせる文藝案内</p> <p>〈連載②〉 自然と子ども</p>	汐見綾幸	88
<p>子どもたちの積累 ― もはじをめぐりながらお話をとく児童をいかに見たいか</p> <p>〈連載③〉 新しい「スパー」のなれた……</p>	ひろのゆづこ・浜田美美明	92
<p>人との関係に問題をもつ子どもたち</p> <p>〈連載④〉 Kさんの笑顔がまっしろ輝く毎日</p>	〈深澤暹氏〉研究佐	94
<p>発達障の比較発達心理学</p> <p>〈連載⑤〉 チンパンジー―研究者・母になる ― ととのおまじいから三歳までの発達</p>	林 葉聖	103
<p>心理学をめぐる私の時代史</p> <p>〈連載⑥〉 いまだ「社会」を知らなかつたころ</p>	浜田美美明	111

発達障書庫 書籍紹介 119

（表紙写真協力）かえで幼稚園（広島県廿日市市） 撮影：中丸元良 編集：丸山 碧 Design: STUDIO-A210(X)

特集 地方発！保育・子育て支援の新たな取り組み

地方発の保育・子育て支援の新たな可能性

— 新制度時代の協働のデザイン —

玉川大学大学院教授 大豆生田啓友

1 子ども・子育て支援新制度スタート

「子ども・子育て支援新制度」が二〇一五年からスタートしました。この制度の最大の特徴は、わが国の社会保障制度に「子ども・子育て」が位置付けられた点にあります。子ども・子育て関連三法は、社会保障と税の一体改革の中で成立したものであり、消費税増税分の中から、子ども・子育て支援の量の拡充と質の改善に充てられることとされているのです。日本は、先進国の中でGDP費に対する子ども関連予算が最も少ない国の一つといわれてきたこと

定すること」とされていることです。そして市町村は、いわゆる「地方版子ども・子育て会議」を置くことが努力義務として定められており、ほとんどの市町村で設置されています。そして、地方版会議では、地域の実態を踏まえ、子育て当事者等の意見も反映させた事業計画を作る事が期待されているのです。

つまり、この新制度では、国の大きな枠組みはあるものの、各自治体での特徴を出していくことができるのです。これは、画期的なことであり、自分の自治体の子育て環境をよりよくしていくチャンスでもあります。そのため、この地方版会議において、活発な議論が行われ、住民も参画して地域独自の事業計画が作られている自治体がたくさん生まれてきました。その一方、行政主導の形式的な会議が数回持たれるだけで、委員がほとんど意見を言うこともなく、計画策定に至っていない自治体もあるようです。この差は非常に大きいものと思われま

3 自治体での活発な取り組み

筆者は、内閣府の委託調査として行われた「平成二七年度 地方版子ども・子育て会議の

を考えれば、一番進進といえるでしょう。しかし、さまざまな課題がある中で、この制度をいかにしっかりと進めていくかが今後の大きな鍵だと考えられます。

この新制度の目的は、子ども・子育て支援法第一条にあるように、「一人一人の子どもが健康やかに成長することができる社会の実現に寄与すること」にあります。そのために、すべての子どもと子育て世代をすべての世代が協力し、社会全体で支えていくような仕組みを形成することなのです。具体的な取り組みとしては、①認定こども園の普及を図ること、②待機児童を減らし、子育てしやすい、働きやすい社会にすること、③幼児期の学校教育や保育、地域の

取組（市町村子ども・子育て支援事業計画）事例調査」の企画・評価委員会の委員長としてこの調査にかかわらせていただきました。この調査では、活発な活動を行っている三〇カ所の市区町村を対象としてヒアリング調査等を行い、事例集を作成しています。この調査を通して、議論が活発になるようなさまざまな工夫が行われているほか、自治体独自の特徴的な取り組みが行われていることがわかります（一般財団法人日本開発情報研究所 二〇一五）。

その中で、会議を効果的に進める工夫として、以下のことがあげられています。

- ・子育て当事者などの委員が意見を出しやすい環境づくり
 - ・専門部会やワーキンググループの設置
 - ・委員の自主的活動との連携・支援
- また、子ども・子育て支援施策の具体的内容については、以下の観点等から事例が紹介されています。
- ・子どもの権利条約に準拠した条例や指針を制定
 - ・教育・保育の量と質の充実（認定こども園の普及、幼児小の連携推進、等）
 - ・妊娠、出産から子育てまでの切れ目のない支援の方策

さまざまな子育て支援の量の拡充や質の向上を進めること、④子どもが属している地域の子育てでもしつかり支援すること、などがあげられています。

しかしながら、都市部を中心とした待機児童がまったく解消されないという深刻な実態があります。その不満の音がブロクを通して拡散され、国会でも大きく取り上げられることになりました。少子化が将来の日本を左右する深刻な課題であることを理解しながら、これまで、抜本的な改革ができない実態があったのです。その背後には、十分な国民的な合意が得られていなかったこともあるのかもしれませんが。そう考えると、しっかりと子ども・子育て支援の充実には国民的な合意を得て、この新制度を基盤にとだけ本気で取り組むことができるかが最大の課題といえるでしょう。

2 地方版子ども・子育て会議の動き

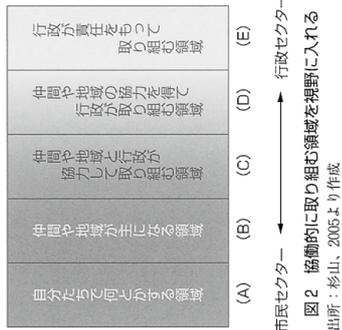
この新制度には、重要な特徴があります。それは、住民にとつてもつとも身近な自治体である市町村が子ども・子育て支援の実施主体として、「市町村子ども・子育て支援実施計画を策

ここで取り上げた自治体の取り組みの一部は、今回の特集でもかなり取り上げさせていただいています（世田谷区、墨田区、和光市等）。それらの論文を読めば、それらの取り組みが、いかに魅力的であるかが理解できると思います。これらの魅力的な取り組み事例は、他の自治体へも大きな影響を与えつつあるようです。そのため、このような自治体での活発な取り組みの広がり、地域の活性化のみならず、日本全体の子ども・子育て支援政策の底上げとなるものとして、大きく期待されています。

4 墨田区での子ども・子育て会議の取り組み

筆者は、現在、墨田区の子ども・子育て会議の会長をしています。会長に就任した際、どのように会議を進めればよいか、非常に戸惑いました。新制度の重要な特徴が地方版会議になることは認識していましたが、どうすれば活発な議論が生まれ、地域実態に即した事業をデザインできるかということのノウハウがありませんでした。

その時に、大きな刺激を与えてくれたのが、市川市の市民版子ども・子育て会議の存在でし



が行われるだけでなく、地域の世代を超えた人材育成や、支え合いのネットワークをデザインする機能があります。そして、事業によっては、そうした市民的な支え合いを行政が支援、協働することによって、さらに力を発揮することができるようになります。先に述べた内閣府の委託調査でも、市民の自主的な活動を行政が支援・協働するという取り組みがいくつも紹介されていました。まさに、地域での子育ての協働です。そこには、行政の市民協働に向けた大きな意識改革も必要です。

しょう。

新制度時代の大きな特徴として、認定こども園の普及があげられていますが、必ずしも認定こども園になるかならないかにかかわらず、その理念はとても大切な視点だと考えられます。それは、親の働き方で地域の子どもの育つ場が分断されないこと、すべての乳幼児に質の高い教育・保育が提供されること、すべての子育て家庭に対して安心して子育てができる支援を行うこと、です。

そして、これまで幼稚園、保育所で制度的に分断されていたものを一元的に捉えていくこと、です。これからは、幼稚園、保育所のよいところを生かしていくという視点が大切になります。だから、幼稚園、保育所の垣根を越えた連携・協働が重要になるのです。また、公立・私立の垣根も越える必要があります。さらに、保護者や市民との連携、地域のNPOなど子育て支援団体との連携、小学校などの学校との連携等が重要になってきます。

地方版子ども・子育て会議においては、こうしたさまざまな関係者が一堂に会して地域の子育てのあり方を検討する場です。それは、協働での研修を行うほか、公開保育を行ったり、共通のガイドラインを作るなど、幼児教育・保育

6 NPOとの協働

筆者が豊田区の子ども・子育て会議を運営する方向性としてもう一つ思い描いたイメージは、横浜市のNPOとの協働のイメージでした。横浜市では、各区にある地域子育て支援拠点の多くをNPOが受託しています。横浜市では、筆者もかかわっている「NPO法人びーのびー」をはじめ、子育て当事者が立ち上げたNPOがたくさんあるのです（大宮生田、二〇〇〇）。

びーのびーは母親たち約二〇名が親子の居場所の必要性をうったえ、自分たちで子育てひろばを作るなどの先駆的な活動を行いました。そうした活動が国からも注目され、「つといの広場」事業が生まれたほか、横浜市の第一号の拠点の運営法人として委託されたのです。横浜市ではいち早く公共サービスを民が担うような、市や区との協働としての事業が誕生したのです。当時、子育て真っ最中の母親たちの団体に、大きな拠点を市が受託するという画期的でした。しかし、こうした当事者性を尊重し、行政が市民的活動をバックアップする動きは全国へと広がっていったのです。

の質の向上へとつながる動きになっています。さらにそれは、地域の小中学校や保育者養成校などをも巻き込んだものとなる可能性をもち込んでいます。まさに、幼児教育・保育の質の向上は、競争の原理よりも、外部に対して開かれた、協働の原理が重要なのだと思います。

*

子ども・子育て支援新制度には、課題もたくさんありますが、その一方で、全国で自分たちの子育てや保育を、協働してよりよい方向に変えていくとする大きなムーブメントも生み出しており、その理念は確実に動き出しています。少子化が進行し、近い将来、消滅する可能性がある地域があることが大きな話題となり、地方再生が叫ばれています。子どもの笑い声がたくさん外で響くような、そして、子どもの泣き声も含め、そうした子どもの声をすべての世代が喜び、支え合えるような地域を作ることが、持続可能な日本社会の根幹になるのだと思います。だからこそ、このような「新制度時代」のムーブメントが全国にはがっていくことが必要とされるのです。

文献
一般財団法人日本労働関係研究所 二〇一五「平成二十七年

今回の特集の論文の中にも、世田谷区での区民版子ども・子育て会議との連携や、和光市のネウボラ、各地での利用者支援事業などの取り組みなど、市民的な活動を行政との連携や協働のなかで行っている取り組みを取り上げています。まさに、地域での子育ての協働をいかにデザインしていくかが、今後の大きな鍵となるでしょう。

7 地域での幼児教育・保育の質向上の協動的な取り組み

さらに、重要な動向として、各地での幼児教育・保育の新たな取り組みが大きなトピックとなっています。本特集でも、舞鶴市、横浜市、高知県、世田谷区、豊田区、北九州市の取り組みを紹介しています。地域での新たな協働のデザインは、幼児教育や保育の取り組みとしても起こっているのです。

中でも、舞鶴市の取り組みはとても刺激的でした。それは、保育現場と行政担当者の問題意識から声が上がって、研究者と協働し、公私立、保育所・幼稚園の壁を越えた保育の質向上の取り組みであり、小中学校まで巻き込んでいったボトムアップの改革は画期的なものといえるで

地方版子ども・子育て会議の取組（市町民と子ども・子育て支援事業計画）事例調査報告書（<http://www.8cao.go.jp/shoushi/shinseido/administer/report/E27/jirei/pdf/index.html>）
大立生田啓夫 二〇〇六 支え合い、育ち合いの子育て支援 関西学院大学出版社
杉山千世 二〇〇五 子育て支援でシヤカイが変わる 日本評論社

おおまおつた ひこしゅ

1986年生まれ。玉川大学大学院教育学研究科教授。『子どもが抱えださなくなる 母性の心と子育ての未来』、『子ども主体の協動的な子育て』が生まれる保育園』（編著）著書。

地域一体型による 保育の質向上研修の開発

—舞鶴市の挑戦

地方大学客員教授 北野幸子

1 地域一体型の保育の質向上研修の きっかけ

日本の保育の現状を考えると、各地で素晴らしい実践がなされている一方で、意識と信頼に依拠した性善説に基づいたシステムのままで本当に良いのか、このままでは保育は破綻してしまっているのではないかと不安をもちます。

保育者の資格の階層化は極めて単純です。幼稚園教諭の免許は、一種、二種、専修、保育士資格は単一です。職階も園長、主任、担任と単なる場合が多いです。

実践経験や研修の蓄積の可視化も、なされて

「待機児童のいない地方であるからこそ、新しい制度のもと、少なくなってきた子どもの保育の質の向上を図りたい」という相談を何度か受けて、一緒に研修を開発することにしました。

大きな制度（予算の拡大、法的規定の整備等）の改革はトップダウンに依拠する部分があるとしても、「実践」をターゲットとした保育の質の向上はボトムアップで、地方からこそできるのではないかと考えました。舞鶴市の研修開発を一緒に進めるにあたり「公開保育」を協働の条件とさせていただきました。保育の「実践」こそを、ターゲットとし、地域で保育を開くことをめざし、公私園種を越え、さらには保護者や小中学校ともつながる舞鶴市の保育の質向上研修の開発がスタートしました。

2 保育の質の向上研修の前提と方針

1 保育の価値基盤の確認

舞鶴市での継続的な研修をスタートする前に前提と方針を確認させていただきました。保育の質の向上を図るためには、「保育の独自性と

いません。自らの実践を省察したり、学び続けたりして、力量を向上させるための努力を積み重ね、実際に向上させている先生とそうでない先生の差異化が図られていません。この背景には、努力を見せない謙遜の美徳、やりがいのもと子どものために陰ながら努力することの美徳という保育界の文化があると考えます。

しかしこんな中、気づいたら保育者は不足し、保育者の待遇格差は公私園種と広がり、さらに民間私立園間の格差、地域格差も拡大するのではと危惧します。日本は、小学校教員と保育者の待遇格差が先進国で最も大きい国の一つとなつてしまっています。統廃合問題については、他の学校教育施設や福祉施設と比較して圧倒的

保育者の専門性」について自覚することが大切であると考えました。よって研修では年度の最初と最後には講演等で「保育の独自性と保育者の専門性」について何度も確認することにしました。また、一人ひとりの保育者が自らの言葉で「保育の独自性と保育者の専門性」を表現する力の向上を図ることを、研修の方針としました。

ここで大切にしたいことは、保育の価値基盤の確認と共有です。保育の独自性と専門性を確認することは、その仕事の倫理性、社会的価値を自覚することにつながると思います。また謙遜の文化にあつて見えにくくなっている、専門職としての自負や誇り、そして互いへの尊敬の気持ちを大切にしたいと考えました。

2 公開保育を前提とした研修

先述のとおり、「公開保育」を条件に一緒に研修開発を行うことにしました。保育者の専門性を考えると、幼稚園免許と保育士資格のいずれかあるいは両方を有する保育専門職こそが、保育実践の中心的な責任を負っています。つまり保育実践の質の鍵は保育者が握っています。

「公開保育」は、保育の実践の質の向上に大変有効な方法であると考えています。保育実践

に乳幼児を対象とした施設が、補填の対象となつていないようです。

人件費が低く、研修の保障もままならない、実践を振り返ったり、実践を計画したり、教材研究をすすめたり、環境を構成したりする時間が保障されていない園もあります。

地方大学の乳幼児教育専攻の担当者として自分ができることは何か。現状の改善はトップダウンからだけではなく、ボトムアップからでも可能なことがあるのではないかと。保育界の文化に対する地方からの挑戦や改革が大切ではないかと。

四年ほど前、子ども、子育て支援新制度の議論の最中、筆者は、不安をもちつつもやはり変化に向かうべきと悩み考えていました。ちょうどその最中、舞鶴市から突然の訪問が続きました。

当時舞鶴市では、保育の質の向上をどうやって図っていくべきかと悩んでおられました。市や保育部局内だけではなく、外部研究者を導入した研修方法を模索されていました。筆者の研究室に訪問された何名もの行政担当者の中には、保育所長経験者や保育士もおられ、皆さん私と同様、新制度への不安を感じつつも、現状を打破したいという、新しい時代への希望を感じておられました。

には唯一無二の方法があるわけではありません。よって、実践について一方が教え、他方が教わるという一方向的な教授的な研修だけではなく、双方向的な研修が大切であるといえるでしょう。

保育の公開では、同じ保育を観て、実践を基盤として、保育を語り合う機会が得られます。つまり実践力の向上に役立つといわれている省察を独りではなく協働で行うことが可能です。これは現象である保育の実態を可視化し、言語化するスキルを向上させることにもつながります。公開保育の実践者も謙遜ばかりせず、また、寡黙や影の努力を美徳とするだけの文化とはまた異なる、専門職としての保育者の実践の説明責任を異なす方法を磨いていく機会となります。

特に、可視化や言語化については、構造的であることを意識することとしました。「子どもの姿（興味関心や、生活課題等）から導き出された「ねらい」や「育てたい子どもの姿」などの教育意図性があつたのか」「子どもの姿が前提となつていて「ねらい」が設定されていたのか」「ねらい」の具現化のための「環境構成」や「援助の工夫」となつているか」そして「実際はどうだったか。そう判断する根拠はどういった子どもの言葉や行動からか」を意識するこ

としました。

公開保育の後は実践検討会を必ず実施することとし、自評も参加者からのコメントも、印象評価や印象批判ではなく、具体的で構造的な語り合いをめざすことを前提としました。舞鶴市の研修では、このように保育を語り合う文化を、公私園種を越えて地域で創生することをめざすこととしました。

実際に計画段階では、不安や葛藤も示されました。舞鶴市では、実践の質の向上を意図とした市内を対象とした公開保育は、それまでに実施されたことがなかったのです。まったく新しいチャレンジとなりました。〇か×かとか、点数をつけるような研修ではなく、共に考え高め、参加者が尊敬し合い対等な立場で保育を語り、考える研修であることを何度も確認し、実施の運びとなりました。

3 ドキュメンテーションを用いた研修

保育の独自性や保育者の専門性を可視化する方法として、ドキュメンテーションを活用した研修を行うことにしました。

ドキュメンテーションとは、イタリアのレッジョ・エミリアで活用されている保育の可視化をめざして作成されている子どもの育ちや学び

の変化を可視化したものです。その対象は当初は保護者でした。しかし、実際には、保育者同士が他クラスの状況を知ったり、他の保育者の実践から学んだり、互いに相談しあったりといった保育者同士が語り合う媒体として機能しています。また、子どもが経験を振り返ったり、他児の経験を共有したり等、子ども同士が語り合う媒体としても機能しています。

ドキュメンテーションを用いた研修では、公開保育と同様、保育実践の質の向上とつながっていくことを前提とし、机上で学ぶだけではなく、アクティブに学びあうことを方針として進めていくことにしました。ドキュメンテーションとは何か、その定義、意図、他国での実施状況を知る職業のみではなく、必ず実物を見て語ることで、実際に書いたものを持ち寄って、そのドキュメンテーションを材料に語り合うこと、工夫を考へること、共に創ること、各園でも作成し、それに伴う子ども、保育者、保護者の変化を報告するなどといった内容を含めることとしました。

以上の前提と方針で、二〇一三(平成二五)年度より公開保育を前提とした研修とドキュメンテーションを用いた参画型研修が、舞鶴市の「プロジェクト型保育推進事業」保育の質の向

上研修事業として二〇一三(二〇一五)年度の第一部としてスタートしました。

「プロジェクト型保育」とは、児童中心主義の理念を大切に、生活と遊びの中で、子ども主体の環境を通じた乳幼児教育を象徴することばを舞鶴市と共に検討し名づけたものです。これには、「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼児連携型認定こども園教育・保育要領」が共通に大切にしていることを確認しつつ、舞鶴市が一体となつて、舞鶴市らしい、次世代育成の発展を図っていければという願いが込められています。

この間、同事業には、京都府子育て支援特別対策事業費補助金「保育の質の向上のための研修事業」や、子ども・子育て支援体制整備総合推進事業費国庫補助金などの支援を得ることができました。

3 地域一体型保育の質の向上研修の体制

先に述べたとおり当初より、公私園種の壁を越えた研修をめざすこととなり、筆者の研究室には、福祉関連部局と教育委員会の行政担当者が訪問し、研修開発がスタートしました。舞鶴

市の民間保育園長による舞鶴保育園長会に委託させていただきました。

幼稚園と保育所の管轄が業種組織的に名目上予算的に別があつても、舞鶴市のすべての子どもの支援を想定し、連携を図ることをめざしました。二〇一三年度から二〇一五年度の三年間で、公立保育所、民間保育園、公立幼稚園での公開保育が実施されました。残念ながら私立幼稚園は公開保育やドキュメンテーションを活用した研修への参加はありましたが、保育の公開に手をあげた園はありませんでした。

与えられた受動的な研修ではなく、当事者として参画する能動的な研修を志向し、参加は初年度の二〇一三年度から、公開保育も二年目の二〇一四年度から、立候補を原則としました。年度はじめの全体会と、年度終わりの報告会は広く、保幼小学校の先生方を対象とし、一五〇人におよぶ多数の参加がありました。

二〇一五年度には、「舞鶴市乳幼児教育ビジョン」の策定に着手しました。その体制は、委員会は学識経験者三名、民間保育園組織代表、私立幼稚園組織代表、公立幼稚園園長、公立保育所長、小学校長会、中学校長会、PTA連絡協議会、民生児童委員連盟、子ども育成支援協会、子育てサークル連絡会からそれぞれ一名ずつ、

市の公選委員二名からなります。

加えて、委員会からのトップダウンとならないように、作業部会が設置されました。公私問わず舞鶴市のすべての保育園と幼稚園から一名ずつ、一八の小学校のうち八名(八校)、七の中学校から四名(四校)によって作業部会が組織されました。作業部会では、公私を問わず保育園、幼稚園、小学校、中学校の先生方が次世代育成のあり方を議論してくださいました。

第一回目の作業部会ではそれぞれの教育現場で気になる課題を共有し、「舞鶴市で育てたい子ども像」に対する共通認識を図りました。第二回の作業部会では、舞鶴市で育てたい子ども像に向けて、めざすべき教育・保育の姿を話し合い、第三回にはその実現への方法や手段、第四回では保幼小中の連携と、園学校と家庭・地域との連携について、第五回には家庭、保育所・幼稚園、小・中学校、地域それぞれの役割のあり方についての検討がなされました。

最終的には二〇一五年一月に市長に「舞鶴市乳幼児教育ビジョン」に関する提言書」を答申しました。

4 地域一体型保育の質の向上研修の実際

1 公開保育と実践検討会

公開保育と実践検討会は、延べ数で二〇一三年は四園、二〇一四年も四園、二〇一五年は五園が実施しました。公開保育の前には、事前訪問による相談や意見交換などもなされました。事前訪問では、初めての公開保育に対して緊張や不安が高い様子がどの園からも感じられました。また、実際、公開保育の後の実践検討会でも二〇一三年度当初は、緊張感から公開保育の当日の保育についての自評というよりも、準備した日ごろの保育の内容を紹介するといった様子もみられました。しかし、二年目以降は前年度公開した園の継続実施希望もあり、新規希望も毎年増えることとなり、たとえば三年目にあたる二〇一五年度には三園ありました。公開保育に手をあげた園が、日程の関係で実施できないといった嬉しい悲鳴がおこる状況にもなりました。当初の公開保育を躊躇する様子からは予想できなかった嬉しい変化がみられました。

公開保育に向け指導案等の当日配布資料の準



図1 ドキュメンテーションを活用した研修

備も各園に依頼しました。指導案については各園での日常の作成習慣について違いが大きいのとがわかりました。実際に作成するにあたり「職員間で語り合い、相談することができ楽しかった」「計画の段階で評価の観点などについて考えたことがなかったので記録に時間がかかった。あらかじめ当日の子どもの姿を想像しながら、評価を考える新しい経験ができた」といった感想も得られました。

当日配布された資料からは、環境構成、保育の意図についての意識の有無が確認されました。また指導案に記載されている内容と、公開保育からみることができた実践の特徴や課題が重なっていることが明らかになりました。環境構成や保育者の援助に関する記述が豊かな園では、実際の保育現場で保育者の予測や、みとり、活

動の選択肢等が多く、子どもが自己主張したり主体的に動いたりする姿が多くみられました。一方で、環境構成や援助の工夫に関する記載が少ない園では一斉型の活動や保育者の指示の機会が多い傾向もみられました。

三年間にわたり他園の保育をみたり、指導案から学んだりすることは、他園との比較で自園をみる機会となったようです。

実際、自園で保育をみあう場合よりも、「子どもに〇〇させねば」「自分は〇〇できているか」といった課題を抽出しようとして保育をみるといった意識が低かった、との感想もありました。また、「子どもが何に興味をもつて、どう楽しんでいるのか」「保育者の関わりを子どもがどうとらえているのか」「子どもが何を必要としているのか(教材の量や種類、環境構成)」「本当に子どもが幸せそうか」といった異なった視点でみることができた、との感想がよせられました。他園の保育を親と同僚と話すのが楽しかったといった感想もありました。

それに加えて、保育者不足や経費の問題があり、公開保育への参加や実施の希望があっても実現が難しいといった声もありました。これを受けて、市では公開保育を実施する園への支援

等をはじめました。さらなる工夫も今後の課題です。

2 ドキュメンテーションを活用した研修

ドキュメンテーションを活用した研修は毎年五回実施しました。単発ではなく継続的研修を意図しました。毎年年度当初にドキュメンテーションとは何か、作成にあたって大切にしたいことは何かを確認しました。これに加えて、ワークショップ型研修を実施しました。聴講型研修ではなく参加型研修を意図しました。各園の責任がドキュメンテーションを持ち寄り、報告しあいました。報告とコメントをライブで応答的に行う研修も試みました。

グループワークは、この三年間で様々な形で実施することができました。自らのドキュメンテーションを小グループで紹介しあう単純なものから、他園の一つのドキュメンテーションを題材に深く話し合う研修、対象年児別グループで発達の特徴を抽出する研修、ポスター発表のように壁一面にドキュメンテーションを貼り出し発表と意見交換をするといった研修などです(図1)。

当初は発言や質問がなかなか出ない傾向がありました。初年度の冬から、保育者の方々の

意見がたくさん積極的に出るようになり、会場が賑やかになっていきました。保育の可視化の記録の技術だけではなく、保育の楽しさを再発見し実践の質の問題を考えることや向上につながる対話がうまれてきたように思われます。

ドキュメンテーションを活用した研修の成果としては、まずドキュメンテーションそのものの変化があげられます。当初は、ポートレートのような子どもの顔写真やかわいさを意識した写真中心でしたが、子どもの視線の先など子どもと対面ではなく子ども側からの写真が増えていきました。子どもの興味関心、活動の変化をあらわすものが多くなっていきました。記述内容も子どもの様子と先生の感想、できた、できなかつた、といった結果をあらわすものを中心に、育ちの変化、学びの内容、保育者の教育的意図や五領域の内容へと変化しました。二年度以降、新たに参加した園の当初のドキュメンテーションと継続して参加している園のものが並んで掲示されていると、その違いに気づきやすく、ドキュメンテーションは書けば書くほど上達するものだったということもわかりました。

また、アンケートの結果から保育者や実践の変化がわかりました。保育者からは作成にかかる時間が減ったことや、書くことへの苦手意識

が減りつつあること、園内でも他クラスへの関心を発達の視点からもつようになったこと、語彙が増えて保護者への説明がしやすくなったといった感想もありました。行事や一斉活動を、子どものその時その時の興味関心に応える形で問い直したり縮減したりした園もあります。子どもとともに遠足の場所、発表会の内容を話し合うようになったといった事例もありました。

保護者の変化もみられました。「当初自分の子どもの写真を採す傾向があったが、他児や他クラスのドキュメンテーションを読む姿が増えた」との報告があったり、保護者の言葉も、「〇〇してくれないのか」といった要望中心の表現から「頑張っていた様子を褒めてあげたい」といった遊びの中の育ちや学びを見る視点や「教材として使ってください」といった教育的視点のコメントが増えた、といった変化が報告されました。

5 おわりに

舞鶴市における公私園種を越え、小中学校も巻き込んだ次世代育成の専門職の同僚性の形成はスタートしたばかりです。義務教育の壁や、

保育者不足による研修の具現化の困難さなど課題は山積です。謙遜や誠実さに依拠した文化への挑戦、個々の保育者や園の自助努力に依拠するだけではない、保育の質向上を図る自律的な研修の開発はこれからも続きます。

付記

本論で取り上げた研修については舞鶴市のHPにて詳細に公開しています。

謝辞

舞鶴市の次世代育成を共に考え、日々尽力してくださっているすべての関係者の方々に謝辞します。多くの学びの場と機会を与えてくださった、保育園や幼稚園の先生方、行政の方、そして誰よりも子どものためににより感謝します。

またの ために

1970年生まれ。神戸大学大学院人間発達環境学際専攻。認定こども園の施設長(主任)ひかりのくに) 保育課程編 (編者 北谷隆雄)。

新制度時代の動き

地域別 持続可能な 施策に なるために

このコーナーは、日本各地での保育にまつわる話題や課題を取り上げ、保育新制度時代に持続可能な園になるためのヒントを探っていきます。

第2回

0～15歳の育ちをつなぐ 舞鶴市の取り組み「幼児教育・保育の質向上推進事業」

DATA

京都府舞鶴市
人口：84,220人
世帯数：35,092世帯
面積：324.10km²
(2016年1月現在)

第2回は、京都府舞鶴市健康・子ども部とも育成課の飯田美和先生と、神戸大学大学院の北野幸子先生にご登場いただき、一緒に取り組まれている、舞鶴市の「幼児教育・保育の質向上推進事業」について語っていただきました。

2013年度から続く同事業は、行政が積極的に公的資金を投入して、幼稚園・保育所・公立・私立の枠組みを超えた実践研修をしております。全国から注目されています。

発稿：2016年5月

人口減・少子化だからこそ「少ない子どもを大切に」

北野先生(以下、北野)：地方都市では少子化が問題となっておりますが、舞鶴市の現状を教えてください。
飯田先生(以下、飯田)：800人台だった年間出生数が4、5年前からじわりじわりと減り始め、今は700人程度です。

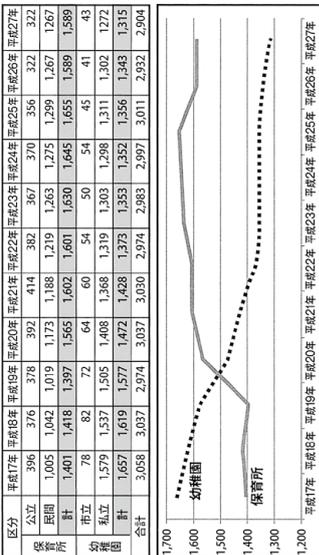
また、幼稚園と保育所の園児数は8年前に逆転し、保育所の入所者の割合は増加傾向にあります。

北野：保育所のニーズは高まり、幼稚園は定員割れという実態なのです。
飯田：はい、それでもう5歳の子は幼稚園のほうが多いので、保育



左：北野幸子先生(神戸大学大学院教授) 右：飯田美和先生(舞鶴市健康・子ども育成課)

舞鶴市の幼稚園と保育所の児童数の推移



所は乳児のニーズが増えているということ。特に0・1歳児が増えています。

北野：0・1歳児が増えた背景をどう思いますか？

飯田：はつきりとしたデータはないのですが、働く女性が増えたことに加えて、今年度から二子とも、子育て支援新制度」が始まり、求職中でも入園できるようになったことが大きいと考えています。

北野：なるほど。少子化を逆転にとつて、質の向上を図ろうとしているのが舞鶴市の「幼児教育・

保育の質向上推進事業」ですよ。少ない子どもをとにかく大事にして、それぞれの個性や主体性を伸ばし、豊かな市民に育てていこうと。

飯田：はい。公立・私立の幼稚園、保育所を合わせても30園程しかないので、園種を超えて全施設での取り組みを始めました。北野先生にも加わっていただき、保育の質向上に向けて始めたのですが、それまで公開保育すらやっていたことがない園が多かったので、最初はなかなか進みませんでした。

北野：公開保育に対して抵抗感があつて、初めはやりたくないという雰囲気でしたね。どうしても自分の保育に点数をつけられるように思つてしまつてでも一度やってみると、どの園もやつてよかったとおっしゃいましたし、翌年も公開保育にエントリーされていました。

この取り組みを通して、私がすばらしいと思ったのは、公立も私立も

関係なく、先生同士が大変仲良くなったこと。研修で「あなたのドキュメンテーションはここがいいね」「ここをこうしたらいいんじゃない」と話し合える仲間ができてきました。

飯田：園が違つても、お互いに会すると、それぞれの悩みが一緒だったと気づくんですね。

北野：例えば教材がもつとあつたほうがよいのではとか、認定保育を少し減らそうかなとか、自分のなかで漠然と感じていた悩みが、他園の先生からコメントをもらうことで、問題意識としてよりクリアになります。

園内研修などで同僚性が築けてきたら、次には、さらに保育の質の向上を図りたいという意欲が生まれます。保育を公開したり外部講師を活用したい。舞鶴市はちょうどその時期だったのかもしれないですね。

行政の発信による園と家庭の連携

飯田：ドキエメンテーション研修では、自園の課題として保護者とのコミュニケーションをあげる園が多かったです。

北野：確かに、保護者に対して発達に適した教育が何かということをもっと発信する必要性を感じます。

飯田：私は乳児期でそれをするのが大事だと思っています。0歳の時から、年齢ごとの発達過程やそのかわりをしっかり伝えていかないと、幼児になった時に「できる、できない」という結果重視の視点で子どもを見てしまう親になりがちです。

北野：今は、親が子どもの育ちを学ぶ機会が少ないから。公園に行ったら子どもだらけという時代ではなく、モデルとなる母親像が周りにいない。家庭との連携は、そういう意味でも大切だと舞鶴市はとらえているのですね。

飯田：遊びのなかの学びや育ちをま

ちんどキエメンテーションでお伝えすると、保護者の言葉が変わってきます。以前は、行事の感想というと、「もつとこんなことをさせてはしかった」と苦情になりがちだったところが、例えば発表会の日にうまくいかなかった子どもに対して、「今日はうまくできなかつたけれど、今まで頑張ってきたことをほめてあげたい」と、肯定的に見てもらえるようになってきました。

北野：保護者との関係性の改善ですね。園は保護者を「支援の対象」として上から目線で見るのではなく、パートナーとみなすことが大切ではないでしょうか。片方が専門家、片方は子どもにとってもかけがえのない存在である親。その二者が連携して、一緒に子どもを育てていくという姿が理想ですね。

飯田：そこはやはり行政がまず発信していかなければと思っています。

です。

教育に携わる専門職なら、自分が15歳の子どもを教えているからといってその年齢だけが大事だと思っているわけではないはず。3歳も5歳も10歳も、それぞれが尊い。年齢ごとの教育の専門家が、一緒にこの町の次世代を育てるんだという同僚意識をもてたことがやりがいにつながったと思います。

飯田：はい。今回は、教育委員会と一緒に取り組めたことも大きいと思います。小・中学校の指導主事も協

力してくれ、広がりがありました。子どもの問題行動は、中学生で出てくることが多いそうです。だから中学校の先生は本当に困っているのですが、中学校のなかだけで解決できる問題ではなく、トラブルの根っこはむしろ乳幼児期にあると思います。

北野：小さい時の経験や体験

が不十分だと、その後様々なところで禍根を残します。幼い時の自尊心こそが大事で、それは0〜1歳の時期であり、2歳の自己主張、3歳の他者に対する関心、4〜5歳のルールの認識と規範意識の育ちへとつながっています。

中学生になってから見直すのでは、本人と周りの大変な努力が必要でしょう。手を尽くしてもどうしようもない現状もあると思います。

飯田：今まで、幼稚園・保育所の先生はそういう中学生の現状を知ることがなかったのですが、今回共有することができました。

北野：小さな町だからこそできたことだし、0〜15歳の育ちをつなぐための乳幼児教育ビジョンを作ろうとされている市長のリーダーシップもすばらしいですね。

保育者の専門性、独自性がより浮き彫りに

小・中学校の職員とも同僚意識をもてた

北野：今年度は、乳幼児教育ビジョンの策定に向けて、0〜15歳の教育にかかわる職員が集い、乳幼児教育について考える機会をもてましたね。

飯田：はい。市内すべての幼稚園、保育所と、小学校から8人、中学校から4人の職員が集まり、0〜15歳の育ちを共に考える研修や話し合いを行い、先生方がそれぞれの立場で、受けもつ子どもたちの課題を出し合いました。それをもとに乳幼児期に必要な要素をまとめて、舞鶴市の乳幼児教育ビジョンを作りました。

北野：参加した先生方が、「こういう機会をもててよかった」とおっしゃっていたことも印象的でした。上から言われたビジョンではなく、「自分たちの町の子どものために信じていかなければ」と思っている

北野：今回の取り組みは、保育者たちが自分たちの仕事の重要性を感じる機会になったと思います。保育や乳幼児期の教育は、情緒の部分を育てるという非常に専門性の高い仕事ですが、園のなかだけにいると当たり前になってしまいがち。小学校や中学校の先生と一緒に話すことで、改めて自分たちの独自性を意識できたのではないのでしょうか。

飯田：保育者一人ひとりに、「保育の質を維持向上させていきたい」という意識の素地ができてきたと思います。これからは、制度として確立していきたいです。例えば乳幼児教育センターを設置したり、乳幼児教育の専門職を雇ったり、研修をきちんと受けられるシステムを作ったり。北野：職員研修が、義務教育である小・中学校の法定研修と同じレベルでできるというですね。今日はありがとうございました。



特集

2

第60回全国保育研究大会 (徳島県)開催 ～すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ 社会の実現をめざして～

平成28年10月12日(水)から14日(金)にかけ、全国から約1,500名の参加者を得て『第60回全国保育研究大会』を開催しました(会場:アスティとくしま 他)。

「すべての子ども・子育て家庭を対象に、幼児期の学校教育・保育、地域の子子ども・子育て支援の質・量の拡充を図る」とする「子ども・子育て支援新制度」が平成27年4月1日に施行され、1年半が経過しました。法の趣旨を踏まえ、新たな給付の仕組みの下で、会員それぞれの現場で、健やかなる子どもの育ちのための取り組みがすすめられています。

公・私立21,000か所の保育所・認定こども園等の会員で組織している全国保育協議会と、保育士等18万3千人が加入する全国保育士会は、保育の社会的な意義・役割についての認識を一層深めるとともに、全国の子どもの最善の利益の保障に向けた保育関係者の姿勢を広く社会に発信するために、大会宣言『すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして』を、大会初日に採択しました。



徳島の子子どもたちと保育士による迫力のあるアトラクション
「おどらなそんそん あい(1/愛/藍)・あわ(OUR/阿波)・おどり」

第3分科会 「保育者の資質向上を図る」

- 発表①** 保育の質を高める自己評価とは～自己評価と園内研修を見直す～
栃木県宇都宮市 社会福祉法人河内福祉会 さくら保育園
園長 佐原 美佳 氏/主任保育士 佐藤 史子 氏
- 発表②** 「子ども時間」の設定による子ども主体の保育を展開するために
京都府舞鶴市 社会福祉法人河守福祉会 八雲保育園
副園長 中小路 愛美 氏/保育士 迫田 顕子 氏
- 発表③** 子ども理解を深める所内研修の工夫
～職員チーム力を高めるための3年間の取り組み～
香川県高松市 高松市立川島保育所
副所長 瀧 佐織里 氏/主任保育教育士 佐々木 信男 氏
- 助言者** 武庫川女子大学 教授 倉石 哲也 氏



発表① 園独自で作成したスキルチャートを用いて自己評価に取り組んでいましたが、保育の質の向上につながる取り組みであったかを園全体で考え、これまでの取り組みの問題点、自己評価表の内容・園全体の評価のまとめ方・研修計画の立て方を改善。新しい評価表を作成し、自己評価の結果から園全体の弱みを抽出しました。それを次年度の園内研修テーマとすることで職員が主体的に保育の質を高める研修計画を立て、全体の保育の質の向上につながったとの発表でした。

発表② 5年前から実施している保小連携活動において、保育や教育の質の向上を図ろうと、子ども主体の保育である『子ども時間』を取り入れて、成長する子どもたちの姿と、そんな子どもたちの姿に触れてともに成長する保育士の姿を考えました。
子どもを見る保育の視点を3点設定し、『子ども時間』の保育記録を事例に出して学び合い検討することで遊びの質が変化し、子どもたちの学びの姿から保育士の自己肯定感も高まり、変容が見られたとの発表でした。

発表③ 職員同士が互いの子ども観や保育観を知り、学び合い認め合うなかで職員チーム力を構築するために、参加型所内研修で子どもを肯定的にとら

える視点、かわり方の学びや相互理解を深めました。

この他に所内研修では、エピソード記述を基に子どもの心の育ちの支援のあり方を学ぶとともに、他のクラスでの保育体験を自分のクラスの保育に活かす研修などによるチーム保育も実施することで、職員間の相互理解が深まり、職員一人ひとりがスキルアップし、保育の質の向上とチーム力を高めることができたとの発表でした。

助言 保育の質の向上を、園内研修を通して実現するには、成果を視覚化させることが重要で、その1つは園での研修・教育モデルをつくること。保育者は専門職としての資質・専門性を高めるために、学びの連続性を担保することが大切。資質の中心には、保育士の人間としての哲学(使命感)があること。また、『保育チーム力』を高めることも重要であり、保育士がお互いに高めあうための協働性や、人材育成に必要なスーパービジョンの意義など、細かく講義していただきました。

最後に、保育者の資質の向上は組織全体で取り組むこと、施設間で研修内容を共有するなどして、幅広い視野で取り組んでほしいとのエールをいただきました。

保育士の質の向上をめざして 子ども時間の設定による子ども主体の保育を展開するために

京都府舞鶴市 社会福祉法人河守福祉会
八雲保育園

1. テーマ設定の理由

本園では、子ども主体の保育を実践する為に「子ども時間」を取り入れている。それは、5年前から実施している舞鶴市立由良川小学校との保小連携「つながり活動」において、保育や教育の質の向上を図ろうとした事がきっかけである。

「子ども時間」の設定については以下の3点を考慮し、子ども自らが遊び込める時間と環境をつくることを重視した。

- (1) 時 間 自分のしたい遊びがすぐできるように、登園後すぐから。
- (2) 年 齢 異年齢を基本とした交流
- (3) 活動内容 四季の自然を利用した園庭での遊びや造形遊び等。

2. 研究の目的と方法

本研究では、「子ども時間」を通して成長する子ども達の姿と、そんな子ども達の姿に触れ、共に成長していく「保育士の姿」を考えたいその際、遊びの中で子ども達の姿をみとる保育の視点を以下の3点とすることにした。

- (1) 環境の中で対象に働きかけて活発に遊んでいるか。工夫しているか。
- (2) 子ども自ら言葉を発しているか。伝え合っているか。
- (3) 人やもの、対象とのかかわりにより学びを深めているか。

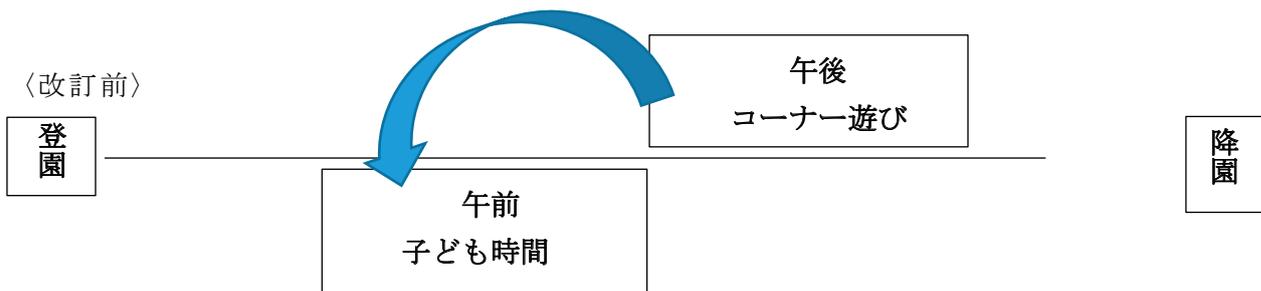
3. 研究の経緯

「子ども時間」とは、子どもが自分のペースで遊び込む時間である。保育実践においては、寄り添い支えることが重要であり、保育士は子どもが遊び込む為の環境を準備し、迎え入れる。

以下の項目では、子ども達が使用する教材や教具、道具の整え方、保育における保育士の支援の心構えや方法、「子ども時間」の時程設定等について、改訂前と改訂後とを比較しながら取り組みの経緯について紹介する。

(1) 日課時程（1日の流れ）について

自由遊びの時間を「子ども時間」とし午前に設定する。



〈改訂後〉

(2) 道具（教材・教具）について

- ・デザイン性のものから、本物の調理道具へ
おろし器、泡だて器、すりこ木、やかん、鍋、ふるい等
- ・固い物から柔らかい物(形を変化させられる物)へ
自然物(泥、砂、水、実、種、葉、花)石けん、箱、紙、等

(3) 教材・教具の置き方について

- ・何気なく置くのではなく、教育的意図を持って
- ・一斉の姿を予想したものでなく、あの子はこういう事をするのではという予想の元で
- ・誘い水は目的達成の為でなく、遊びの動機づけとして

(4) 保育士について

- ・指導するのではなく、寄り添い支える
- ・指示を出すのではなく、共感し提案する
- ・見守るだけでなく、展開を見通しながら見守る
- ・担任制から、担当制へ

(5) とり組みの経緯について

スタート 平成 24 年 7 月

- ・様々な活動ができるように、様々な遊びの準備をした
- ・子どもの遊んでいる姿を連想しながら、多すぎない量の道具を出しておいた
- ・自然物との出会いに注目した



1年目 平成 25 年 4 月

- ・「遊びと環境について」毎日試練の日々
- ・保育士のストレスがたまらないように、一人の悩みは皆で共有する
- ・遊びの瞬間を心にとどめ記録をとる



2年目 平成 26 年 4 月

- ・子ども達が前年に見たこと、経験したことを受けついで遊ぶようになる
- ・保育士も見通しが持てるようになる
- ・準備にも支援にも各保育士ごと工夫がみられるようになる

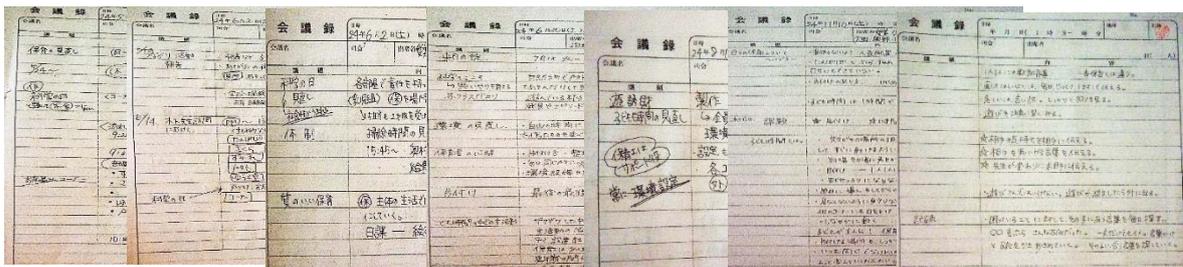


3年目 平成 27 年 4 月

- ・新任保育士が子ども時間を理解して働けるのか？
- ・子どもたちと同じように見守り寄り添う事が大切
- ・5歳児の学級の活動としてのテーマ活動の試み

(6) 根拠資料（会議録より）

「子ども時間」の導入や設定においては、管理職を中心に、共通理解を醸成するために職員会議を重ねてきている。以下がその根拠資料となる会議録の一部である。



平成24年5月12日（土）

- ・保育の見直し月～水日課あり。木金、日課なし、外内関係なく自由に遊べる環境
- ・5月24日から仮称「科学の日」と題して、すみれ/コーナーをしっかりと設定、遊戯室/固定遊具の設置、戸外/その時々で〈流れ〉9時30分遊びスタート

平成24年6月2日（土）

- ・主体的な時間「科学の日」 〈声かけ・設定〉
- ・保育士の思いが違ふと場の雰囲気が変わってくる
- ・各部屋で責任を持ってルールも作りながら見守る
- ・保育士主体の生活でなく、子どもの自由時間を作って大切にしてい

平成24年6月30日（土）

- ・自然物であそぶ。自然物で見立ててあそぶ。その中で思いやりを育てる
- ・遊んでいる様子をお便りで発信する。子ども達の発見やエピソードをわかりやすく書いて伝える
- ・子ども時間でできた物は、貼って飾って置く。作った物を並べて置くと、子ども達の脳に刺激 を与えて良い

・保育者の心得、片付け方、整理整頓が重要。毎日同じところに必ず片付ける。口は出さずに動きで示す

- ・環境設定を頭を使ってすると子どもも頭を使ってする
- ・子ども時間の中での主活動
- ・ざわざわした中での主活動の効果と結果。主活動の活動の場の設定を見直しながらコーナーの中で設定する方法。コーナーにも目をくばれ、主活動も入れる場所。保育士はあくまでお伝い 子どもの要求を受け止め伝える。異年齢の関わりの場である。ルールは徹底する。必ず。

・主活動のあり方

絵画や製作は8人以上は出来ない。大事な所と主活動両方に目が配れるように環境を整える。子どもの関わり方。子どもは2つの事が出来る。8人の活動の様子を見ながら後から入ってくる子ども同士で教え合う中で、教える子がその子の分もやってしまう事があるが大丈夫。やってくれている姿を見て、いつか自分もやってみようという気になったらよい。いつか出来るようになる。無理に気がないのにやらせようと思っても力にならない。

平成24年7月26日（土）

- ・おたより/子ども時間増刊号も発行する
- ・第三者評価でも言われたが、発信が少ないのもったいない。
- ・園での生活を知らせていく。
- ・8月のテーマ「続・子ども時間」等

平成24年11月10日（土）

- ・子ども時間とは
- ・先生がその場所の担当にいるけれど周りをしっかりと把握してすぐ動けるように
- ・その場その場に声をかけて指導していく（個々に）
- ・片付け、一人一人に声をかけていく。全員に言うのではない
- ・まかせっきりにならない
- ・前日に導入をしてからの次の日の製作がある
- ・危なくないように見守りながら、2、3人に道筋を伝えておいて他のコーナーにも目をかけ かけ

をする

- ・しなやかに動く、まずはゆっくり歩く。子どもが主人公！保育士がこうもっていこうと思って はダメ！！
- ・片付ける場所もしっかり決めておく。指導型にならないように
- ・いつも同じでなければいけないわけではないので年齢によって変えていけば良い
- ・一人一人に教育的指導、一斉保育とは違う
- ・直してほしい事は毎日じっくり1対1で伝える
- ・忙しいは言い訳。しっかりと周りを見る。遊びを注意深く見る
- ・相手の気持ちを相手に伝える。相手を思いやる言葉を伝える。先生が代わりに相手に伝える
- ・保育士は遊びこんではいけない。遊びが成立したら外に出る
- ・こまっている事に対してその子に合う言葉を毎日探す
- ・〇〇言ったら、こんな反応だった。一文だけでもいい。言葉がけと反応を書きとめていく等

平成25年4月6日（土）

- ・記録/書く練習。個人記録ノート77名分
- ・子ども時間を記録にとる
- ・大人は遊びこんではいけない。遊びこんでしまうと保育士指導型になってしまう
- ・ヒントを与えるのは困っている時だけ
- ・10分で移動していく。（5分でもいい、1分の時もある）
- ・子どもが遊び込んでいる時に声をかけると遊びが中断される
- ・遊び込ませる誘い水等

4. 実践の効果

研究の経緯で示したように、「子ども時間」による環境設定や教材・教具の整え方、子どもをみとる保育の視点の変更は、本園に新たな子どもの見方をもたらし、それまで見られなかった遊びを生み出すようになった。いわゆる、子どもの遊びが質的に変わる手応えを感じたのであった。

本稿では、それらのことについて事例を通して検討すると共に、子ども時間においての「保育士の変容」について紹介する。

(1) 事例1 「だんご虫ってポケットが」 記録 岸田紀子（本園での勤務暦32年）

事例1	平成24年6月28日	3歳児	記録（岸田紀子）
「だんご虫って、ポケットが好きなんやでえー」			
部屋を飛び出したマヒロは、迷うことなくスロープ横を目指した。花壇の中をのぞき込み草をかきわけ、そのブロックと土のすきまを端から端へと目で追っている。			
「だんご虫おった」だんご虫を手にとると、そっとポケットの中に入れた。「だんご虫って、ポケットが好きなんやでえー」「だんご虫は暗いところがすきなんやもん」			
<p>〈考察〉</p> やみくもに探すのではなく、一目散にその場へ向かう様子に3歳児の力強さを感じる。土の中が暗いということを理解した上でポケットの中の薄暗さと結びつけたのである。			

・活動を振り返って（事例1で見る保育士の変容）

これまでの私であったら、マヒロのこのような言葉もその姿もありふれたことと見逃していたと思う。もっと極端に言えば「キャー だんご虫はポケットには入れないよ」と言ってしまうていたかもしれない。もし、そんなことを言ったとしたらマヒロのこれまでのだんご虫との体験、そこで得た感性、伝えようとした思い、それら全てを台無しにしてしまったであろう。

子ども時間の中、ひとり一人の姿を見つめることでその動きや言葉には全て意味がありそれを丁寧にくみ取っていくことで個々の成長を読み取ることができると実感した瞬間である。

岸田は、本園の主任保育士である。子ども時間の運用にあたっては、自身の変容の必要性があったものと考えられる。これまでの保育を振り返り、子ども時間の運用にあたりどのような思いでやってきたのか聞いてみた。

子どもと創る「はじめの一步」	主任保育士 岸田紀子
<p>私は本園に勤務し32年、長い間保育士指導型保育を続けてきたが、今ではそれが遠い過去のこの様に思い出される。その時代の私の保育とは子どもに手をかけ、いろいろなことを教えていくことが努めとっていた。</p> <p>そんな中、平成13年に園長指導の元、異年齢児保育のきょうだい活動がはじまった。当初の私は子どもにゆだねることに不安をかかえ、まようことが多くあった。それをどの様に乗り越えてきたのかと思い出すと、日々の話し合いによる子どもの姿の共有と次のステップへと導いてくれる園長の存在が大きかったと考える。</p> <p>園長・副園長・当時の主任をはじめ、私達職員一同が同じ方向に進み、当園のチームワークにつながったのだと思う。そんな歩みの中でおとずれた子ども中心の保育「子ども時間」の運用は私にとっての新たな試練となった。私にとっての試練とは、</p> <p>① 様々な活動が出来る「子どもの学びが豊かになる素材の準備」とはいかなることか？具体的に何をどこにどんな風に準備するのだろうか。</p> <p>② 子どもの姿の記録とは？いつどんな風にどんな姿を記録するのだろうか。</p> <p>先の事例は、不安をかかえながらも毎日とり続けた記録の中、子どもの姿が見れたと感じた最初のエピソードなのである。</p>	

(2) 事例2 「けんかしとる」 記録 澤田 梓（本園での勤務暦2年）

事例2	平成27年7月17日	4歳児	記録 (澤田 梓)
「けんかしとる」			
<p>今年はカニの発生率が高い。裏庭へさつま芋の水やりに行く度に捕まえては帰り、観察ケースの中、今や5匹のカニがひしめいていた。</p> <p>「けんかしとる」</p> <p>翠南が心配そうに翔太に伝えた。翔太はすみれ組の生き物博士、何か良い手立てを示してくれると</p>			

思ったのだろう。すぐに他の子ども達もやって来て、観察ケースをのぞき込む。

「けんかや、けんかや」

「見せて、見せて」

「上にのっとる」

「先生けんかしとる」

SOSを受け、「どうしよう」と更に問い返す。

「せまいかなあ」

「大きい所にひっこした方がいい」

「家も作ってあげた方がいい」

「遊ぶ所もいる。そしたらけんかせん」

勢いの良い返事が返って来た。

〈考察〉

カニに自分たちの生活の姿を重ねることで想像し、広い空間や居心地の良いすみか、遊ぶ場所が必要だと考えている



・活動を振り返って（事例2で見る保育士の変容）

「けんかしとる。」から始まったカニの引っ越しは、その後、子ども達の興味に満ちた活動へと展開を見せた。引っ越しの際には、手で持つことが出来ずペットボトルを使って移しかえていたが、カニについて調べたり、調べた事を試したり、次々と勢いよくカニにかかわろうとする子どもの姿に驚いた。保育士が何かをしてあげなくても子どもは必要なことや物を見出し、創造する力があることを痛感した。また、子ども達の力で家を作り、調べ上げて世話をしたことでカニへの愛着がわき、カニのために居心地のいい空間づくりに励んだことで命の大切さを考えることにもつながった。このような子どもの姿は保育士指導では到底見られなかっただろうと考える。

本事例は、2年目の保育士である澤田によるものである。この活動を通して、おそらく初めて、活動が展開していく様を目の当たりにし、子ども時間にたいして手応えを感じたものと思われる。

ここでは、本人による聞き取りと、他の職員からの聞き取りを比較することにより、経験値に元づいた意識の違いを明らかにしたい。

①園の先生方に気付かせてもらったこと（記録 澤田梓）

活動を支える為に、園の先生方に気づかせてもらったことは、以下の点である。

- ・活動の提案として、子ども達が興味を持ち始めていることを知らせていただいた。
- ・環境設定として、必要な物やその数、場所などアドバイスを頂いた。又、それが何のために必要か教えて頂いたり、気付くきっかけとなった。
- ・子どもへの支援の仕方として、活動中の子どもへのかかわり方（言葉のかけ方、見守り、記録

) を実際活動の中で指導して下さるので、先生の言葉と支援をすることの意味が結び付きやすい活動の展開を先読みし、見通しをもって環境を整えることを指導していただき、目の前のことばかりしか見えなかった私も見通しを持つことができました。又、その為には、子どもが発見したり学んだりすることを保育士が知っておかなくてはならないことも指導していただいた。

②園の他の職員によるサポート（記録 迫田顕子）

若手保育士にとって、この「子ども時間」は私達が最初に学んで来たように連携、記録、遊び、環境、支援と順序だてて学ぶことが良いのだろうが、保育経験の浅い段階では、一度に全部の必要にせまられることに、難しさがあるのかも知れない。

それゆえに、若手保育士の指導には、手取り、足とり側に寄り添って、言葉を手渡すようにと心がけている。経験値の浅い若手保育士は先が見えないのである。それは子ども達の姿とも重ねることができる。子ども達の支援と同じく指示するのではなく、寄り添い支える・指示を出すのではなく、共感し提案する。見守るだけでなく、展開を見通してかかわることで活動をサポートしている。

(3) 事例3 「小さいけど重いんや」 記録 迫田顕子（本園での勤務暦20年）

事例3	平成27年8月21日	5歳児	記録（迫田顕子）
「小さいけど重いんや」 —浮かぶと沈むの関係性—			

お泊まり保育の際、図鑑と見比べながら拾い集めた貝とその他の収集品を、次の日たらいの中へ入れ、砂を落とせるよう準備しておいた。すぐにライチとリオがやって来て、たらいの中をのぞき込む。「貝は全部沈むなあ」と私がつぶやくと、「貝は重いんちゃう」とリオが言う。「くるみは大きいのに」とライチは不思議そうである。確かにくるみは全て浮いている。「くるみは軽いんや」リオの中では、重さを計る法則があるようだ。「じゃあ、これは？」と私が沈んでいる小さな実を指すと、「小さいけど重いんや」とリオ。ライチはハッと気がついた様子で、「くるみには何も入ってないんや。これには何か入ってる。切ってみよ」、カッターで切ってみると、「かして」と広げて見入った。瑞々しい中身がつまっている。「くっせ〜。ゲー出そうや」と、そのにおいが生命力を感じさせる。



その様子を見ていたサクミチは、「花は浮くかなあ」と花を探しに行った。朝顔の花をとって来て水の中に入れた。「浮いた」又、出かけて行き、今度は葉っぱを持って来た。「浮いた」そして先程の実を息を止めながらそーっとその葉の上に乗せた。「浮いた」さっきまで沈んでいた実が葉の上で浮いた。

「これおもしろい」サクミチは独り言でおもしろいと何度もつぶやきながら、ふたつ・みつつと実をのせて行く。レンが来て「何やってるの？」と尋ねた、「実は重いのに葉っぱの上に乗るとこうなった」とサクミチ。その説明を聞き、レンは「こんなんするでえ」と実を高い所から落とした。それでもやっぱり実は葉の上で浮いた。「あーおも



しろい」座ったままジャンプするようにサクミチが歓喜している。レンも何だか得意気である。

〈考察〉

7月15日に、ケンセイが発信したアンボイナ貝から始まり、貝の種類や形を調べていた子ども達は、今回、水に沈む貝の特徴に気付き、新たな発見につながった。それは今後貝の成分などに思いを及ばすきっかけとなるだろう。

又、リオは重い物は沈み、軽い物は浮かぶという「比較・対照」によって、「浮力」の素朴生活概念を獲得している。

ライチは中身を調べ見比べることで、その重さを感じとっている。

サクミチは、3才児の時遊びの中で動かなくなったシーソーを見て「重さが同じなんや」ということに気付いた。その気付きは両天秤でした比較を今回は「浮かぶー沈む」という上下関係の中で確かめている。

レンの行動も、実験である。高い所から落とすことで増すエネルギーを利用し、変化を見ようとしたのではないだろうか。

・活動を振り返って（事例3で見る保育士の変容）

本事例は、次々とくり広げられる子ども達の考えに目を見張り、やりとりや表情に注目しながらとった記録である。その姿を見ることが出来たのは「子ども時間」の中、私自身が「子ども達が、より多くのことが学べるよう、つながりを意識した活動作りや環境作り」を行ったことによるものであると考える。

具体的に言えば、ケンセイが発信した「アンボイナ貝」について、全体に知らせ、皆で調べ、思いをつなげ、大切に温めてきたこと、又、「貝を洗う」活動を、大人の手で済ませてしまわず興味を持った子が、自分でできるよう環境を置いたことによるものである。

子ども達はどんなささいなことからも、色々なことを感じ考えている。一斉保育では、そんな子ども達の感じ方や考え方をひとつひとつ丁寧に見たり、記録したり、考察したりすることは到底不可能である。しかし、「子ども時間」はそれが出来る。子ども達の学びの姿こそが、私達の保育を動かした大きな原動力になっていることは確かである。

事例の検討に当たり、「保育士が変わらなければ、保育を変える事は出来なかった」と言う事を改めて実感するのである。

しかし、園の保育者の一人が変わっただけでは何も変えられない。皆が同じように変わる為に、私達は事細かに打ち合わせを繰り返した事が、会議録から読み取れる。そして、その内容はすべて、今も私達が大切にしている事なのである。

「子ども時間」とは、子どもが自分のペースで遊び込む時間である。その中での遊びを記録し、事例に出して検証する事で学び合い、その時間をより良いものにする為に絶えず工夫する事が、本園の保育士の意識を向上させる事につながっていると自負している。

5. まとめ（記述 迫田顕子）

1、2年目の若手保育士にとってはもちろんのこと、中堅、ベテランの保育士にとって

も、この「子ども時間」における子どもの姿は、未だに驚きと発見の連続である。そこに共通するものは、「子どもって、すごいなあ」という思いであり、子ども達は教えられて学ぶこととは比べものにならない程のことを、自分の手でつかみとっている。

その姿は、先に視点としてあげた(1)～(3)の事項を含め、自己発揮という言葉に置き換えることができる。子ども達の自己発揮の姿を肯定的に見守り、その中での学びの姿を見とることは、子ども達の自己肯定感につながることである。自己肯定感が、この時期の子ども達にいかにか大切かということはここで述べるまでもない。

又、子ども達の姿と同じく、保育士の姿の中でもお互いの姿に驚きと発見を見い出すことができる。それはエピソードを基に語られることもあれば、環境を整える際の道具のそろえ方や置き方、かかわり方の中に見ることができる。

ここで欠くことができないのが、保育士の自己発揮である。では、私達保育士はどのようにして自己発揮して教科書のない「子ども時間」の営みをつむぐことができたのである。これは保育士をひとからげにして語ることはできない。

「手早く理解して動く保育士」「様子を見ながら真似をする保育士」「指導者に寄り添ってもらうことで理解する保育士」等、様々なタイプがある中で、根気強く又、愛情深く導いて下さった、リーダー(園長、副園長)が私達の姿を肯定的に見守り、その姿を認め、更に導いて下さることで私達は子ども達の姿を通して自己肯定感を高め、更なる自己発揮を可能にしたと考える。

子ども達と保育士の間に結ばれた信頼関係、保育士とリーダーの間に結ばれた信頼関係、これこそが全ての根底にあるように思えてならない。

本園の「子ども時間」は、子どもと保育士の自己発揮によりそれぞれを高みへと導く、主体性を重んじた保育であり、その主体性を支えるものは「信頼関係」であると結論づけたい。

6. 今後の課題

これまで子ども時間を通して、個々の子ども達の発見や成長に驚いてきた私達であるが、4年目となる今年度は、更に「発達を意識した環境作りや活動作り」にも目を向け、新たな試みを行っている。それが5歳児における、グループをつくってのテーマ活動である。今年度は、種、スタンプ、サーキット、段ボール、等のテーマでそれを試したが、これまで以上に子ども達の能力を引き出す事が出来たと感じている。テーマ活動の中で湧き出る子ども達の考えやアイデア、それを伝える言葉は、通り一遍のものでなく、相互作用によってどんどん変化し、その柔軟性や思考力には驚かされる事がたくさんある。また、保育士の役割も、先を見通して、瞬間瞬間に、適切な関わりや言葉がけが求められる。

これまでの私達の課題は、子ども時間の「準備」だった。これからの私達の課題は「準備と瞬時」である。準備を充実させ、教育的、意図的に援助するスキルを磨き、保育力の向上をめざして、日々 努力を重ねてゆきたい。

7. おわりに

中小路 愛美

本園の「子ども時間」の運用に当たっては、舞鶴市の連携事業で2年間に渡り、計4回の公開授業をさせて頂いたこと。その際、保幼小連携に関する文部科学省の委員も務められた鳴門教育大学大学院教授木下先生のご指導を受けたことが大きなきっかけです。

保小の連携では、それぞれの子ども達が授業の中で自己発揮する為の教育、保育の見直しに取り組むと共に、教師と保育士が子どもを見つめる目を同じにすることが絶対的な課題となりました。「私達は、子ども達のどんな姿を見たいのか？」その時、自問自答してきたその内容がそのまま、子ども時間で子ども達の遊びを見守る視点となりました。

木下先生にご指導頂いた内容は、連携、記録、遊び、環境、支援と多岐に渡りますが、記録の際には「日々の保育を重視し、映像や保育記録からエピソード記録を作成しましょう」という宿題を頂きました。そこからが保育士の質が問われる始まりでした。

早速、カメラとノートを持ち歩き、遊びの瞬間を心にとどめ、記録をとり始めました。この作業の中で「遊びの意味や原点を見直し、子どもと共に保育を創る」という木下先生の言葉が身にしみてまいりました。遊びは与えられてするものではなく、子ども自らが遊びを創っていくものだということなのです。

本園では、「子ども時間」運用前までは、午後の時間を利用してクラス毎コーナーを作り、異年齢で自由に遊ばせていました。その時もその時で、自分で考え判断し行動しているな、工夫しているなと思っていました。しかし、これらは保育士が準備した中だけの遊びなんだと気がついたのです。

子ども時間の運用後は、様々な活動ができるように様々な遊びの準備から始めました。子どもの遊んでいる姿を連想しながら多すぎない量の道具を出しておき、自然物との出会いにも注目しました。自然物は目的に作られたものではないから、多様性、複雑性があり、色々な見立て、気付きを子どもにも大人にももたらしてくれます。

これまでの日々を思い出してみますと、1年目は、「遊びと環境について」毎日試練の日々が続きました。保育士のストレスがたまらないように、一人の悩みは皆で共有し、明日はどうあるべきかを問い、明日を迎えるようにしました。2年目は、子ども達が前年に見たこと、経験したことを受け継いであそぶようになり、保育士にとっても、見通しが持てるようになった分、少し余裕が生まれてきました。

3年目、4年目、新任保育者も入り、このような保育を理解してもらう為には、子ども達と同じように見守り寄り添うことが大切なのだと感じています。

又、今後は新たな課題にも取り組みつつ、ひき続き研鑽を積んでまいりたいと思います。

保育ネットワーク

「子ども時間」の導入で、子どもが自ら考え、創造する力を育む

京都府舞鶴市にある八雲保育園では、子ども主体の保育を実践するため、平成25年から「子ども時間」という新しい手法を導入しています。「子ども時間」とは文字通り、子どもが自分のペースで遊び込む時間のこと。登園直後から自発的に遊べる環境づくりや、異年齢児との交流、山登りや水の乗遊びといった自然との触れ合い等、子どもの好奇心を引き出す「ワンダーラーニング」に富んだ環境づくりを行っています。4年目を迎え、確実に保育の質が変化してきたという「子ども時間」の現場を訪ねました。

【カテゴリーI】子どもの育ちを保障する
 ①質の高い保育について研究をすすめ、実践につなげます。

●なぜだろう？から始まる「科学する心」を育てる
 八雲保育園の保育理念は、「センス・オブ・ワンダー」に目をひかれる心です。中小路園長は「子どもは、生まれつき向かを探求し、発見したいという性質を持っており、そんな「科学する心」を大切にしたい」と言います。

八雲保育園の1日はとてもユニークです。子どもたちは登園すると、朝礼なしで自分の遊びたいコーナーにまっしぐらに入ります。いきなり「子ども時間」が始まるのです。館内には、おまごことができる会所コーナー、たくさんの木の実が揃った工作コーナー、本で調べ物ができる図書コーナー、虫や生き物を飼育する観察コーナー等が常設されていて、各



「子ども時間」の工作コーナー。いろいろな種類の木の葉がいっぱい

社会福祉法人河守福祉会 八雲保育園 (京都府舞鶴市)

コーナーの内容は子どもたちのリクエストに応じて随時変わります。園庭には砂遊び、自然観察等、季節折々の遊びが用意され、年齢の違う子どもたちが思い思いにグループをつくっては、お気に入りの遊びに集中しています。

昼食前になると、子どもたちは時間を自分で振り回し始め、手を洗って部屋に集まってきました。おやつ時間も同様です。子どもたちが自ら互いに声をかけたり、手伝いあったりします。保育士が大声で号令をかけることはほとんどありません。午後からは集団遊びもありますが、それもあくまで自由参加です。保育士は、子どもたちの種子を丁寧に見守りながら、遊びが停滞していたり、集団遊びが苦手な子や配慮が必要な子等、一人ひとりの状況に応じて諒い水を向けてサポートします。

「まず最初にやり方やルールを伝えて、子どもたちが自発的に行動できる環境を整えます。いきなりでは何をすればいいか理解できず、大人の指示に従うしかありません。そして遊びの中に発達に必要な要素を積み込んでおくこと。そうすると、子どもたちは遊びを通して自然と必要なことを身につけてくれます」と中小路園長は言います。



中小路園長



岸田紀子主任保育士

八雲保育園で「子ども時間」が始まったのは4年前のことです。同園では異年齢児保育や地元小学校との保小連携を通じて、保育士主導型にはない子どもの自発性と発達との関係に着目し、指導指針を見直してきました。最初は試験的に週2日だけ午前中を自由遊びにあてました。岸田主任保育士は「今日はお昼まで自由に遊んでいいよ」とだけ伝え、ずっと子どもの種子を見守り、観察記録を行います。岸田主任保育士は「最初は戸惑いました。子どもに委ねることが特に難しく、保育士にとっても試練でした」と当時を振り返ります。しかし、「例えば、子どもが走り回っていることは遊び道具が足りないのではないかと、そう心配を立て、常設の遊びコーナーをつくると、子どもたちは保育士が何も言わなくても、夢中で遊ぶようになりました」と中小路園長。観察を通して「なぜだろう？」と考え、工夫し、新しい気づきにつなげる。こうした「科学する視点」から、翌月には自由遊びを毎日と増やし、本格的な「子ども時間」がスタート



虫を持ちながら図鑑で調べている子どもたちの様子

が日々つづいている保育記録です。子どもたちの種子を園内で共有するだけでなく、毎月発行している「クラス便り」で保護者にも報告しています。その結果、保護者からも家庭の様子についての発言が増え、家庭と保育園の連携がよりスムーズになりました。

また、平成23年から取り組んでいる由良川小学校との保小連携事業では、小学校の生活科のカリキュラムに年長クラスとの交流授業が組み込まれており、サツマイモの苗付けから収穫、ザリガ二釣り等、年間を通じて頻りに交流を重ねています。さらに、地元の敬老会で和太鼓を披露したり、近所の畑で農作業を体験させてもらったりしています。地元の交通事故防止キャンペーンでは、園外活動も盛んです。

「子どもはみんな、なぜ？とどうして？と自ら考え、工夫や発見を通して、学んでいく力が備わっています。大人にできるのは環境を整えることだけ」との中小路園長の言葉通り、保育園と家庭、地域、それぞれの垣根を越えて、子どもたちが自由に自己発揮できる環境が少しずつ整ってきています。



迫田陽子保育士

子どもに対する「大人対子ども」よりも、「子ども対子ども」の代弁をしたり、保育士主導の頃はなかなかそのような発言や行動が子どもに引き出されてきたね」と実感を込めて話します。

【カテゴリーII】多様な連携と協働をつくる
 ⑤地域の実情を把握し、子育て家庭を支援する資源や連携を充実します。

●家庭、地域とシームレスな環境づくり
 「子ども時間」の取り組みでもう一つ重要なものが、保育士



社会福祉法人河守福祉会 八雲保育園 (京都府舞鶴市)
 施設基礎データ (平成28年10月現在)
 運営主体: 社会福祉法人河守福祉会
 定員: 70名 (男児68人)
 園児数: 0歳3名、1歳10名、2歳14名、3歳14名、4歳21名、5歳10名
 職員数: 16名 (園長1名、副園長1名、主任保育士1名、保育士6名、非常勤保育士3名、管理栄養士1名、栄養士1名、事務補佐1名、保育士補佐1名)
 実施事業: 一時預かり事業、障害児保育事業

※本文中の「カテゴリー」および丸数字は、「全保協の将来ビジョン」に基づき、関連のある項目を記載しています。「全保協の将来ビジョン」は全保協ホームページでご覧いただけます。

実践力向上のため学び続ける保育者をめざせ

舞鶴市が乳幼児教育ビジョン推進で研修

文部科学省の「幼児教育の推進体制構築事業」の委託を受ける京都府舞鶴市は2月4日、「舞鶴市乳幼児教育ビジョン推進事業報告会」を主催し、乳幼児教育の推進について今年1年、保育の資質向上研修園となり公開保育を実施した各園が研修成果を報告。助言者を務める神戸大学の北野幸子准教授は、保育の質向上のためには保育者の実践力の向上が重要であり、学び続ける保育者となるよう求めた。

同市の幼児教育ビジョン推進事業では、子どもを主体とした保育の重要性などについて保護者向けの講演会を実施したほか、乳幼児期の資質向上研修（①子どもを主体とした保育②保幼小連携）、保幼小接続カリキュラムの策定に向けた検討を進めた。

このうち子どもを主体とした保育研修では、公開保育のほか子どもの姿を記録したドキュメンテーションの取組にも保育者が気づきを話し合う参加型研修が行われ、その結果を報告した。ある保育園では、楽器作りに熱中する

3歳児が保育者のアドバイスを受けて演奏に楽しむように。それに触発された5歳児も楽器を作り3歳児とセッションを行うなど活動が広がった様子などが報告された。

保幼小連携では、中学校も含めて園長校長向けの研修会を実施したほか、5歳児と1年生担任に3回連続の研修も実施。接續期のカリキュラムについては、3年をかけて策定することとし、今年度は研修や意見交換、来年度は具体的な議論と事例検討を行う予定であることが報告された。

◎講演

北野准教授が「乳幼児教育の質向上のための園内研修の方法」ドキュメンテーションを活用して」と題して講演。初任研や10年研修など義務教育以上の研修義務をすべての学校種で実施できるように求めた。

この中で、園内研修の取組について、「子どもの主体性を大事にするのであれば、教師の主体性も大事」と指摘。経済協力開発機構（OECD）で

教師の重要性が指摘されていることを上げ、教師の実践力の向上のためには経験を積み重ねるだけではなく、実践を振り返り学び続けることが重要だと指摘した。

また、子どもの命を預かり、全てを自分で判断する必要があるといった教師の仕事の厳しさを指摘しながら、子どものために頑張りが過ぎ、疲弊してしまう危険性も列挙。その一方、園内研修で他の同僚への要求が高くなりがちで人間関係が悪くなる問題について触れ、互いに尊重しともに成長しあう同僚性が重要だとした。

さらに研修の位置づけについては、制度として研修の保障が重要だと指摘。小学校教員と同等の研修体制を公私幼保を問わず全ての保育者に保障される仕組みが望ましいとした。研修の中身については、能動的な研修となると研修が苦痛ではなくなると説いた。

このほか、記録に関して、子どもの事実から課題を発見する重要性を指摘。子どもの姿に関心を持つと園が変わると説いた。研修の成果を次に生かすため、次に何を委ねるのか行動目標ベースで議論することが重要だと訴えた。

(19)

U-iku 2017.2.27

☆京都府舞鶴市の舞鶴市乳幼児教育ビジョン推進事業報告会で、子どもを主体とした保育の実践にとりくむ多くの園の発表を聞いた。その中では、子どもの興味・関心をうまく引き出した事例もあった。

モノを叩くことにこだわりを持つ3歳児。おもちゃなどをうるさく鳴らして制するのが大変だった。そこで、保育者が一考。叩いても問題にならない打楽器を作って遊ばせようではないかと、ドラムづくりに取り組んだ。自分の興味あることなので3歳児も喜んで創作。出来上がったドラムを思う存分叩いて満足した。

その後、ドラム叩きは発展。プロの演奏者と見間違えるほどのスティックさばきでドラムセットをたたくほどに熟練していた。友達とトラブルになるなど、気持ちが悪く感じるときには、ドラムを叩いて立て直す。その子にとっては欠かせない道具になっていたという。どの園でもあんなだろう、子どもの興味・関心をみんなにとって望ましい方向に伸ばした一例。その実践を語る園長のイキイキとして楽しげな表情に保育の底力を感じた。

♪ 編集部よもやま囁き ♪
（所感・雑感・共感・実感・体感）

☆商店街にサテライトの病児保育室を開設し、寂れかけた商店街の賑わいを取り戻すなど、一味かわった保育所運営を行っている園の話を知った。同園は相談至上主義を謳い、どんな些細な疑問や悩み、不安にいつでも対応するという。実際、深夜にも病児保育の予約が入るとか。

この園で面白いと思ったのが、助産師や養育支援担当、ケイスワーカーが職員として働いていること。障害児保育を行っているので、近い将来には理学療法士などの採用も検討

しているようだ。他職種連携により、職員もまな

んでいるらしい。子どもや家庭、地域に対して、より幅広い対応が可能になる得るのではないかと感じた。

学校では、チーム学校と称し、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど教師以外の専門職と一丸となって学校運営にあたらそうとしている。児童減少で教師を増やことは難しいが、対応すべき課題が増えているだけに他職種連携によって充実に図る。保育施設でも、同様の試みができる余地があるのではないだろうか。（山田）

「舞鶴市民新聞」2016年6月3日

舞鶴市教育委員会が、就学前までの乳幼児教育の充実と質の向上を目指し策定した

舞鶴市 乳幼児教育ビジョン 冊子 作成

「舞鶴市乳幼児教育ビジョン」の冊子を作成したII写真。
同ビジョンは、乳幼児期は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期であることから、乳幼児期の子どもの学びや育ちの特性を踏まえ、育てほしい子どもの姿、大切にしたいことを市民全体で共有。各機関でそれぞれの役割を認識したうえで、連携しながら取り組みを進めるための

指針となっている。今後は、①質の高い乳幼児教育の充実。②保育所・幼稚園、学校、中学校の連携充実。③地域ぐるみの乳幼児教育の推進を同ビジョンの基本方針として掲げて施策を推進していくとしている。

電話 66・1009、市健康・子ども部幼稚園・保育所課。



「舞鶴市民新聞」2016年6月24日

舞鶴市乳幼児教育ビジョン講演会

切れ目なく質の高い 教育環境の実現へ

舞鶴市は18日、余部下の中総合会館にて、「舞鶴市乳幼児教育ビジョン講演会」乳幼児期に大切にしたいことを開催した。同講演会は、舞鶴市が3月に策定した「舞鶴市乳幼児教育ビジョン」の内容を広く市民



会場の様子

に発信し、普及を図る目的で行われた。当日は、保育所及び幼稚園関係者や、市民ら150人が参加し、「主体性を育む乳幼児

教育の推進 ～みんなでつなぐ育む舞鶴の子ども」と策定された基本理念などの概要説明に続き、前舞鶴市

懇話会会長の、北野幸子氏が「乳幼児期に大切にしたいこと」をテーマに講演した。舞鶴市幼稚園・保育所課の声田みゆき主任(43)は、「0歳から就学前の乳幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う極めて重要な時期であるが、子どもを取り巻く環境の急激な変化にももたらす様々な問題が生じている。こうした問題を解決するためには、地域・保育所・幼稚園・学校・行政等、市民が一丸となって様々な取り組みを進めていくことが必要となっている」と現状について述べ、「子どもたちは、舞鶴の宝物。

家庭はもちろん、幼稚園・保育所・学校・行政、地域が一体となって守り育んでいく必要がある。乳幼児期の子どもの育ちや学びの特徴を共有し、みんなが子どもたちの土台をしっかりと育んでいくことが、切れ目のない質の高い教育環境をさらに充実させていく」と語った。

「京都新聞」2017年2月8日



舞鶴市内の幼稚園や保育所の取り組みを紹介する参加者(同市浜・市商工観光センター)

工作など取り組み紹介

舞鶴 報告会で5幼保の代表

舞鶴市での乳幼児教育をテーマにした報告会がこのほど、同市浜の市商工観光センターであった。市と市教育関係者に実践例を知ってもらうために市や市委員会が2015年度に策定した「乳幼児教育ビジョン」に基づいた市内の幼稚園や保育所の取り組みが発表された。会では、5幼稚園・保育所の代表者が「工作を広々とした庭で行う」と作品の幅が広がった。「年齢発達に合わせた狙いや遊びを考える必要性を感じた」など成果や課題を話した。また、園児らが小学校での生活にスムーズに入れるよう、事前に小学生と工作や自然活動などで交流する中、舞鶴地区の取り組みも紹介された。

(高山浩輔)



**全国大会で事例発表
舞鶴市の乳幼児教育の取り組みが全国的に注目されています**



市では、私立の園にもご協力いただき、保育所・幼稚園や学校の先生を対象にした乳幼児教育の質の向上研修を行政が研究者と連携して実施しています。

公立も私立も一緒に学ぶ取り組みが評価され、平成27年度の日本保育学会課題研究委員会の研究対象となりました。

それを受けて、5月7日・8日に東京学芸大（東京都）で行われた日本保育学会第69回大会のシンポジウムで舞鶴市も研修事業について発表。発表時に大学教授やジャーナリストなどの委員から出た主な意見は次のとおり。

主な意見

- ◇（公開保育を見て）子どもが主体的に遊びや生活に取り組めるよう環境設定の工夫がされている。
- ◇乳幼児教育には量と質の充実が必要。量が注目される中、舞鶴市が質に目を向けたことは大切。
- ◇0～5歳を対象に地域の子どもは地域で育てるべき。
- ◇公立・私立の保育所や幼稚園も共に学び、行政のサポートで保育の実践者と研究者をつなぎ一緒になって取り組んでいる。舞鶴市の研修スタイルを手本にして研修事業を始める自治体が出てきている。

質の高い乳幼児教育の提供に向け着実に進んでいます

さらに、乳幼児教育の推進体制を構築するための調査研究を行い、その成果を普及する文部科学省の「幼児教育の推進体制構築事業」に舞鶴市が採択されました。

今後、「舞鶴市乳幼児教育ビジョン（平成28年3月策定）」に基づき、子どもを主体とした保育や保幼小連携など公立・私立の保育者・教員の研修や保育所・幼稚園と小学校との接続カリキュラム研究などに積極的に取り組みます。
《幼稚園・保育所課》

MAIZURU

広報まいづる Maizuru City NEWS

2016
12
Vol.970

わたしたちに
関係ある話？

特集

乳幼児教育
子育てに「本気」です。

子育てに「本気」です。

生まれつきよくれたものが、
 単にわたらざることを無難に無難
 な顔で愛くるしき顔で顔を凝らさ
 ず、まぶらしたまを愛おしくも愛する
 子も。言葉や行動をまじくは自
 由に見ているだけで心奪われま
 す。ただ、子どもを愛するまぶら
 以上は、愛。愛は、愛し人しを愛して
 のしりしや、愛を愛ししがら、
 その愛を愛するまぶら、やっ
 はり子育ては、愛し、愛を愛し
 力を盡します。

愛しや愛しやが、力強
 くまぶらに愛してはし。無難
 市を愛するまぶら、愛を愛するまぶら、
 愛を愛するまぶら、愛を愛するまぶら、

進む日本の少子高齢化

現在の日本の人口は1億2,806万人。2060年には人口が8,974万人になり、つまり14歳の少子人口は833万人減少するのは、高齢者人口は3,494万人となり全体の9割が高齢者となる。少子高齢化は、1億2,806万人となる危機的状況であると試算されています。(※1)

今、私たちに求められていること

少子高齢化の進行や地域コミュニティの衰退化、心配される子育て世代の孤立化など、子どもを取り巻く環境にもさまざまな課題が顕著となつてい。現在、本市総務を担つていく子ども達が、「まぶら」を育み、心配から未来で輝くためには、何が求められているのか。

「本気で取り組む乳幼児教育

本市では、妊娠から出産、子育てと切れない子育て環境で、安心して子どもを産み育てるまぶらづくりを進めていきます。特に、産後、産後の乳幼児は、生涯にわたる人形成の重要な時期。親子の信頼関係を子どもの自己肯定感を育み、豊かな学びを通して、乳幼児教育の充実を図り、子どもを育てていきます。

「まぶら」を愛し、愛に向つて、愛を愛し、折々子どもを育て、子ども達が、自らを律する「自律」と社会性を備え、生きる「自立」を兼ね備え、まぶらな子どもを育てていきます。

舞鶴市は子育てしやすいまち



本市の平成28年度4月1日時点の人口は85,121人。約10年で8,071人減少しています。前年度との比較では、1,067人が減少。平成27年度の出生数は741人、亡くなった人は1,031人でした。一方で、平成27年の人口動態調査、平成28年の住民基本台帳年齢別人口から算出される合計特殊出生率は1.931で、同様の推計による民間の調査では、京都府内で1位、近畿で2位、全国で18位となっています。出生率が高くと、待機児童も少ない。舞鶴市は「子育てしやすいまち」と言えます。

今を生きる私たちの使命



本市の就学前児童数(0歳～5歳児)は、この10年間で1,004人の減少。このまちの未来を担うかけがえのない子ども達も減り続けています。安心して子どもを産み育てる環境づくりを地域一丸となつて支援することが、「ふるさと期間」の未来を創造し次世代に引き継ぐこととなります。

※1 出典…国立社会保険・人口問題研究所(1424)推計)



子育ていろいろ Q & A

子どもが入園予定です。保育所や幼稚園の違いは？

▲ 保育所の幼児月齢は0歳から就学前まで。幼稚園の対象児は満3歳から就学前まで。また、子どもを預ける時間帯や入園条件などにも違いがあります。教育内容はどちらにも同じです。昇学できまるので、園の保育、教育を比較し、また、ご家庭の就業状況などと合わせて検討ください。市内には保育所 16 か所、幼稚園 13 か所があります。詳しくは、幼稚園・保育所課 ☎66・1009)へ。
※ 17ページに関連記事

子どもが年長組です。小学校での勉強についていけないのか不安です。

▲ 遊びや体験を通して行う保育所・幼稚園の学びと教科などの学習を通して行う小学校の学びでは、その学び方が違うことから保護者の皆さんも保育所・幼稚園で遊んでばかりいることに不安を感じられるかもしれません。しかし、幼児期には十分な遊びと体験の中で、小学校以降の学びの基礎となる好奇心や探究心、思考力などの「学びに向かう力」を育んでいます。小学校に入学したての頃は、理解や学び方の違いに戸惑うこともあるかもしれませんが、これを乗り越えていく取り組みの一つとして、保幼小での体験活動を進めています(詳細は9ページ)。

次のページでは市が取り組む乳幼児教育について紹介します。

子育てのことでいろいろと相談したいことがあるのですが...

▲ 子育てや教育、非行、虐待など子どものことで心配なことがある場合は「子どももんで」も相談窓口(☎66・2120)へご相談ください。保育士や社会福祉士、教育相談官など専門の職員が対応に応じて一緒に問題解決に向けてサポートしています。秘密や個人情報も厳守します。お気軽にご相談ください。

相手の気持ちを思いやれられる子どもに育ってほしいです。保育所や幼稚園で大切にしていることは？

▲ 相手の気持ちを思いやる心を育てるためには、まず、子どもが主体性を尊重し、自分自身が大切にされる必要があります。何でも子どものしたいようにさせることではなく、子どもが「やってみよう」という意欲や好奇心を尊重することです。園では、遊びの中で友達と思いを伝えたり、相手の思いを聞いた時、時にはけんかやめもめことを経験したり、人と関わる機会を大切にしています。その中で、自分も友達も尊重する「思いやる心」を育んでいます(詳細は6~8ページ)。

子どもも遊んで、親同士が交流できる場所がありますか？

▲ 子育て中の親同士の交流や親子と子どもの遊びの場を提供している子育てひろばが市内に5か所あります(下表参照)。子育てに関する相談や情報提供も行っています。また、子どもを預けたい人と子どもを預かりたい人からなる会費で組織する「まいつづるファミリー・サポート・センター」ではアドバサパーが物介して一時預かりや送迎なども行っています。

子育て支援情報の入手方法は？

▲ 子育てに役立つ子育て応援マップを配布しています。市内の遊び場や病院、教育施設を紹介、公共施設などの乳児用ベッドやヒーシート、授乳室の有無も掲載しています。子育てひろばは、子育て交流施設 あそびあむ、子ども支援課などで無料配布。また、インターネットサイト「そよかぜネットまいん」では、子育てひろばやあそびあむの最新情報を紹介しています。
▶ 詳しくは、子ども総合相談センター(子ども支援課内、☎66・2004)へ。

雨が降っても子どもと一緒に遊べる施設があると聞きました。

▲ 天候に左右されずに子どもと多世代の大人が触れ合っ一緒に遊びを体験できる子育て交流施設「あそびあむ」が市域全域にあります。無料で利用でき、市内外からたくさんの方が利用しています。ぜひ一度遊びにきてください。楽しいあそびの体験を用意します。
◆ 開館時間 9時30分~17時
◆ 休館日 毎週水曜日、年末年始(12月29日~1月3日)



幼稚園の乳幼児教育は進んでいるね。

安心して子どもを預けられるね。

早く友達とあそびたいな。

地域全体で子育てサポートしてくれてるね。

楽しい所がいっぱいだよ。

あそびあむはお母さん同士の交流の場にもなっているんだ。市外からもたくさん友達に来てくれるね。

子育て施設一覧

子育てひろば さるなもと(ルンビニ保育園)	☎76-8833
子育てひろば よちよち広場(昭光保育園)	☎63-4821
子育てひろば ひまわり(西市民プラザ)	☎77-0102
子育てひろば ほっと(八島商店街)	☎82-1615
まいつづる子育て支援センター(中総合会館)	☎82-0103
子育て交流施設 あそびあむ(浜)	☎66-5660
子どももんで相談窓口(中総合会館)	☎66-2120
まいつづるファミリー・サポート・センター(医療法人財団病院)	☎82-0118

変わる乳幼児教育①

子ども自身が創意工夫して遊ぶ

～主体的な遊びの中の学び～

子どもが興味・関心をもち、自ら「遊びたい」と遊びに向かう。子ども自身が考え、選択し、試行錯誤する。子どもも向上心を持って思いや意見を伝え合いながら遊ぶ風潮が広がっていく。保育者は、その子どもの興味・関心、思考をさらに引き出すために環境を整え、見守り、言葉かけを行う。

このように、主体的な遊びを体験を通じて乳幼児教育が求められるようになってきます。子ども自身が興味・関心のあることをテーマとして、友達と一緒に創意工夫して遊ぶ活動は、小学校以降の学びの土台となる好奇心や探究心、主体性、そして社会性といった学びに向かう力が育つことが期待されています。実際には子どもの様子の変化として、自分の思いを明確に伝えられるようになったり、自分で考え遊ぶに意欲が加える姿が見られるようになったり、自分から進んでやりたい遊びを十分に楽しむことになり生き生きと遊んでいる姿が現場から届けられています。

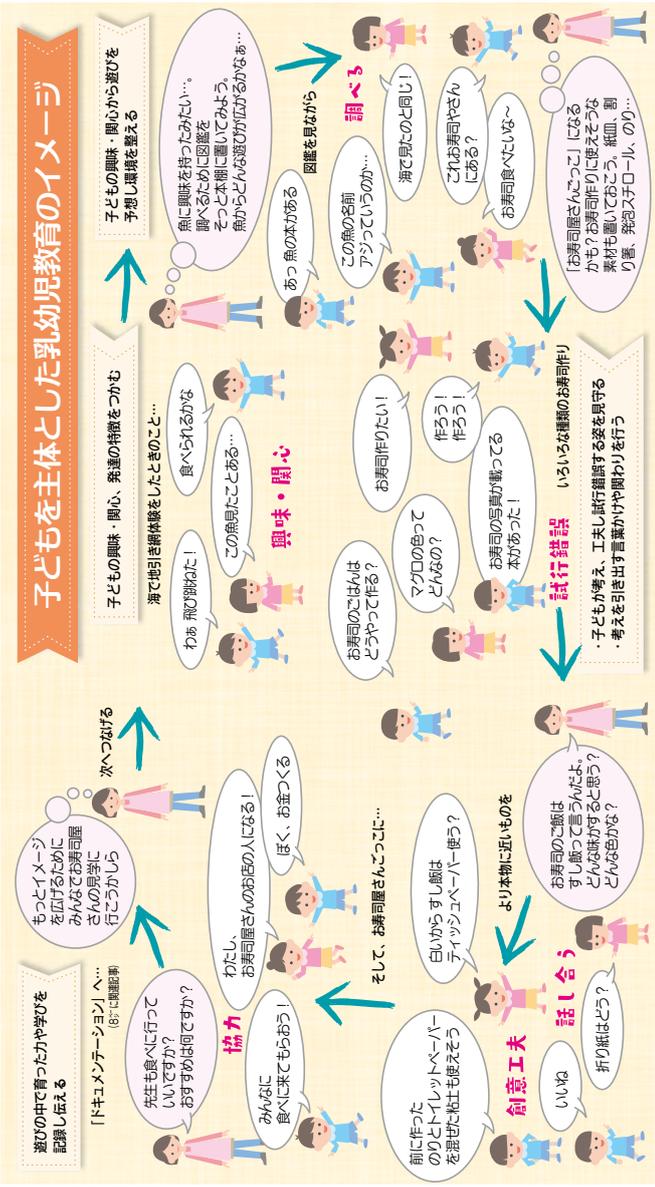
子ども選んで来てくれて相談しながら一つのものを作っています
(タンホボアハウス 公開保育より)



保護者懇話会 アンケートより

子ども選んで来てくれて相談しながら一つのものを作っています
(タンホボアハウス 公開保育より)

親から息子を遊ばせてあげたいという気持ちがあること、自分から進んでやりたい遊びを十分に楽しむことになり生き生きと遊んでいる姿が現場から届けられています。



質の高い乳幼児教育を進めるために

子どもを主体とした乳幼児教育について公開保育を中心とした研修体制のもと、市内のさまざまな保育所や幼稚園の保育者が共に学び合っています。公開保育では指導案を作成し、それに基づき実践を公開。その後、実践者と研究者、他園の保育者が内容について検討します。こうした取り組みが乳幼児教育の質を高めることにつながります。この公立・私立の保育所、幼稚園が共に学ぶ研修は、全国から注目されている先進的な取り組みです。



▲さくら保育園での公開保育



▲公開保育後の事例検討

●現場からの声



東山保育園

繰り返し遊ばせたいという思いを大切にしながら、子ども自身が興味・関心を持って遊ぶ姿を見守り、必要に応じて言葉かけや環境を整える。子ども自身が創意工夫して遊ぶ姿を見守る。子どもが考え、工夫し試行錯誤する姿を見守る。考えを引き出す言葉かけや関わりを行う。

●現場からの声



岡田保育園

「質の高い保育」から子ども自身が「質の高い保育」への挑戦を真摯にしています。子どもを主体とした保育を実践するために、保護者や職員、子ども自身が共に学び合っています。興味・関心や遊びの意欲が育ち、子ども自身が遊びの意欲をもち、自ら進んで遊びたいという気持ちが出てくる姿が見られるようになりました。興味・関心や遊びの意欲が育ち、子ども自身が遊びの意欲をもち、自ら進んで遊びたいという気持ちが出てくる姿が見られるようになりました。

子どもの日常をのぞいてみよう

～可視化「ドキュメンテーション」～

保育所や幼稚園で、子ども達の姿や言葉を書いたものが壁に貼り出していることにお気づきの保護者もいらっしゃると思います。

そこには、遊びや活動の中子ども達が「話したこと」「考えたこと」「発見したこと」「影響を受けたこと」などの活動がどのように展開したのか、などが写真に加えて先生の解説付きで記録されているシートやカードで描かれています。このような可視化の表現手法を「ドキュメンテーション」と呼んでいます。

これによって、園での子どもの姿や成長に気づくことができただけでなく、子どもの姿を主体的に行動する姿や働きかける保護者の意図などを知らすことができます。これは家庭での子どもへの接し方の参考になります。

ドキュメンテーションは子ども達にも刺激になり、写真を見て「ぼつてみたら」「おもしろそう」という興味を引き出すツールともなっています。

また、各保育所や幼稚園の保育者もドキュメンテーションを通して意見交換を行なうことで、乳幼児教育のさらなる質の向上を目指しています。



うみへのもり保育所

ドキュメンテーションを通して、保育者が自分の姿を振り返り、思い込みや固定観念に気づけるようになると思います。それによって、子どもの活動の意味をより深く理解できるようになると思います。子どもの姿や活動の様子を写真や録音の記録に残すことで、保育者や保護者の関わりがより深まり、子ども達の成長のサポートがさらに進むと思います。

また、子どもは自分の姿や成長を自分で確認でき、成長の喜びを感じることができるといわれています。また、自分で自分の姿や成長を確認することで、自信を持って行動できるようになると思います。

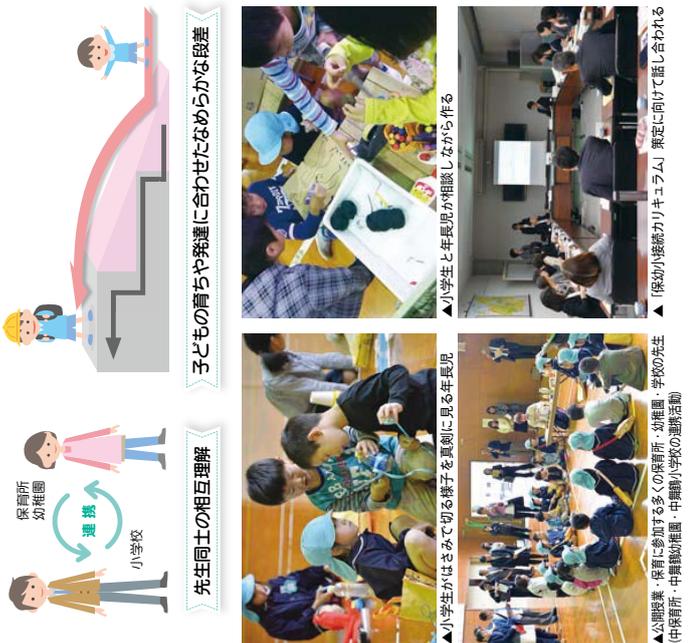
なめらかに遊びと学びをつなぐ

～保育所・幼稚園と小学校の連携～

子どもが小学校への入学を迎える保護者の皆さんの中には、成長を楽しく感じると同時に、問題なく学校生活を送れるのか不安を持っている人もいらっしゃると思います。確かに、小学校へ入学すると、これまでの「遊び」や「体験」を通じた学びから「教科」などの学習を通じた学びへと大きく環境が変化します。この環境の変化に戸惑う子どもも少なくありません。

しかし、乳幼児期に培った「遊び」の中の学びが小学校以降の学びの土台となることから、その力が発揮される「なめらかな」環境になるよう、小学校との連携を進めています。就学前の子どもと1年生との連携活動を通して、幼児は小学校への馴染みを高め、1年生は幼少の良さや成長を体験します。正真正正幼少と1年生の両方から学びを得る機会を大切にしています。

そして、この活動を通して、関係する小学校、保育所・幼稚園の先生が、互いの教育の充実を目指しています。



朝来幼稚園

子ども達が安心して学校へ入学するためには、小学校との連携は欠かせません。これほど小学校の授業を知らずに生活を通じた連携活動を通して学ぶことは、豊かさと成長の土台を一生懸命に築きあげてきました。連携活動の中で、1年生は「一緒に遊びました」といって、1年生と一緒に遊ぶことができて嬉しかったです。

連携のねらいとして、小学校への入学の準備として、1年生は入学前の準備ができたことを喜び、小学校生活を送ることができるようになります。

本園では、遊びを通して学びを深め、多様な体験を通して「生き生きとした」学びの環境を大切にしています。幼児期には小学校から学びを深め、中・高学年の学びへとつなげることで、いかに小学校生活を送ることができるようになるかを大切にしています。

